

第六章 學會、協會、學術研究會、調查會其他

第一節 學 會

一、帝國學士院

帝國學士院は初め東京學士會院と稱し、明治十一年十二月文部省雇顧問米人「ダビット・モーレ」氏の建議に由り文部卿西郷從道氏之を容れ、西周、加藤弘之、神田孝平、津田真道、中村正直、福澤諭吉、箕作秋坪の七氏に諮詢し、之が創設を決定し、翌十二年一月、文部大輔田中不二麿氏は前記七氏を會員とし、文部省修文館を借用して東京學士會院を開き、四月規則を制定し、教育事業の討議及び學術技藝の評論を主たる目的とし、會員は四十名を限り本院に於て選舉し、文部卿の認可を経ることとしたり。明治十八年二月、文部卿大木喬任氏新に本院組織の大綱を定め、學藝の進歩發達と教化の裨補を圖るを目的とし、四十名の會員中十五名を勅選に待ち、二十五名を本院の推選に係るものとし、同年九月より之を實施したり。既にして明治二十三年十月、勅令を以て東京學士會院規程、同二十八年六月同補則を發布せられしが、同三十九年六月其の組織を更革し、勅令

第四百九十九號を以て、帝國學士院規程の發布となりたり。初め明治十二年一月、東京學士會院を開きしより茲に至る迄、福澤諭吉、西周、加藤弘之、細川潤次郎の四氏相踵ぎて院長と爲り、此間會員の公開講演を行ひ、或は定期雜誌を刊行し、學藝及び教化に關して大いに其の力を用ひ來れり。

新に改組せられたる帝國學士院に於ては、其の目的は従前の如く、學藝の發達を圖り教化を裨補するに在りと雖、會員の定數を増加して六十人（後之を百人とす）とし、本院に於て本邦碩學中より推選し、勅旨を以て之を命ぜらるることとなり、又外國人にして帝國に於ける學術の發達に關し特別の功勞ある者は、客員として推選することに定め、院内を二部に分ち、第一部は文學及び社會的諸學科、第二部は理學及び其の應用諸學科を分掌し、會員を折半して各其の部に屬せしめ、其の後更に部を細別して分科を設け、第一部に於ては第一分科を法律學、政治學、經濟學、第二分科を哲學、史學、文學とし、第二部に於ては第一分科を數學、星學、第二分科を物理學、化學、第三分科を地球物理學、地質學、第四分科を生物學、醫學、第五分科を工學、農學とし、當該學科の研究並に之れが發達に關する注意指導に當らしむることとし、役員には院長、幹事及び各部々長を置き、院長と幹事は會員全體より、各部々長は其の部員より選舉し、任期は共に三ヶ年とし、明治三十九年七月、此新規定に據れる役員の選舉を行ひたるに、院長に加藤弘之の男、幹事に重野安釋氏、第一部々長に穂積陳重氏、第二部々長に菊池大麓氏當選就任す。同年九月十四日古市先生勅旨を以て、帝國學士院

會員を命ぜらる、時に先生朝鮮に在りて統監府鐵道管理局長官たり、其の官邸に於て辭令の傳達を受くるに當り、是れ學者として最高の名譽なりとて深く感激せられ、特に禮裝に改め威儀を正して之を拜受せられたりと云ふ。同四十二年六月役員の改選に際し、菊池大麓氏院長に、宮崎道三郎氏幹事に、穂積陳重氏第一部々長に、先生は第二部々長に當選せられ、爾來改選毎に重任して大正十年に至れり。此間大正四年六月、櫻井錠二氏幹事に新任し、大正六年十月菊池院長の薨去に依り、第一部々長穂積陳重氏院長に當選就任し、同年十一月井上哲次郎氏第一部々長に當選就任せり。而して大正十年六月の改選に際し、先生既に第二部々長たること十三年、今や後進の爲に道を開かんと欲せらるると共に、前年十二月學術研究會議會長に就任せられたるを以て、部長として其の力を専らならしむる能はざる事情あり、此改選を機として辭任せられ、藤澤利喜太郎氏は先生に代りて新に第二部々長に當選就任す、爾來先生は専ら學術研究會議會長として盡力せられしが、其の學士院會員たることは依然舊の如く、昭和九年一月の薨去の時に及べり。

之を本院の事業に見るに、組織更新以來、例會の講演に於て、會員及び會員の紹介に依れる學者に各自研究の結果を公表する機會を與へ、且本院紀事、メモアル、論文集、及び其の他の出版物に依りて其の研究を公刊し、更に特別問題に就きては、院内に委員を設けて調査研究を遂げ、又學術上の著書、並に諸學者研究の結果に對しては、審査の上其の優秀なるものに授賞し、毎年一回授賞式

を行ひ、海外學界との連絡に關しては、萬國學士院聯合會に加入し、各國學士院と出版物を交換すると共に、屢々會員を其の聯合大會に出席せしめ、本院を代表して協議に参加し、決議事項を分掌するが如き、或は著名なる海外學者の來朝に際しては之を本院に招待する等、一々枚舉するに遑あらず。

此等の諸事業を遂行せんが爲には、固より容易ならざる資金を要し、到底經常費を以て支辨すること能はざるに依り、其の資金調達に關し、狀を具して宮内大臣波多野敬直男に内申せしに、事畏くも天聽に達し、明治四十三年七月五日本院は左の御沙汰書を拜受するを得たり。

帝國學士院

其院ノ目的ヲ遂行スル爲メ普ク學術ノ研究ヲ獎勵スル旨趣ヲ以テ授賞ノ制ヲ定メントスルノ計畫有之候趣被

聞食特ニ賞典費トシテ本年ヨリ十箇年間年々金貳千圓下賜候事

明治四十三年七月五日

宮内省

他方に又第二部々長たる先生は、本院の爲に更に資金の補充に盡力せられ、自ら財界の重鎮たる團琢磨、木村久壽彌太の兩氏に説き、男爵三井八郎右衛門氏、男爵岩崎久彌氏の兩家より、明治四十

四年以降毎年各金壹千圓の獎學資金の寄附を受領することなれり。

茲に於て本院は、宮内省の御下賜金を恩賜賞と稱し、其の他と區分し、特志者の寄附金も亦授賞獎學補助費等の資金に充てたるが、授賞者詮考に關し、同四十三年十月、一般授賞規則を議定し、同四十四年二月、恩賜賞に關する條項、同年十一月、特志者寄附金を以てする帝國學士院賞授與條項を議決せり。其の後大正六年二月本院は又故桂太郎公爵記念事業として學術獎勵基金を受領せり。既にして大正八年末 皇室御下賜金十箇年の期限を告ぐるや、大正九年一月九日、更に十箇年間毎年金貳千圓の獎學資金御下賜の恩命を拜し奉り、爾來之を繼續して今日に至れり。此學術研究に關する優渥なる恩召こそ、洵に帝國學士院會員の感激恐懼に堪へざる所にして、之に依つて益々學術研究の効果を齎らし、大に國家の爲に貢獻するを得たる所以と謂ふべきなり。而して先生第二部々長たるの間に於ける受賞者の總數は、恩賜賞二十三件、帝國學士院賞二十四件、桂公爵記念賞三件に及べり。

二、日本工學會

工學會は明治十二年十一月の創立にして、元工部大學校が初めて卒業生を出したる時、志田林三

郎、辰野金吾、南清、三好晋六郎、高峯讓吉、會禰達藏、其の他卒業生諸氏に依りて發起せられ、實に我國工業に關する學會の濫觴とす。其の主旨とする所は、工學に志ある者相提携して、各自の智識を交換し、我帝國の工學工業及び工藝の進歩發達を圖るに在り。會員を正員、准員、客員、贊助員の四種とし、創立當初の會員は僅に二十三名なりしが、明治二十年十一月古市先生正員として入會せられたる頃には、會員既に八九百人に達し、翌二十一年一月役員半數の改選あるや、先生直ちに幹事に選ばれ、會長子爵山尾庸三氏、及び副會長渡邊洪基氏を扶けて會務に執掌せられ、爾來改選期毎に重任し、益々本會の隆盛を致せり。是を以て明治二十三年五月、畏くも宮内省より金壹千圓御下賜の恩命を拜し、同年八月第一回臨時工學會大會を東京に開催するに當りては、會員一千二百名を算し、又實業家の援助與つて力ありたるとに依り、本會の基礎確實を加ふるに至れり。

此第一回臨時大會は、古市先生を委員長として、本會に縁故深き舊工部大學校の校舍たりし虎の門學習院に開かれ、開會當日先生の述べられたる要旨に曰く、工學會創立以來十年の星霜を経て、今や會員千人を超え、工業界に雄飛せんとするの機運に達せり、然れども之を泰西の工業に比し、昨年開かれたる巴里博覽會の二萬坪の機械館に充滿せる陳列品を見れば、我が工學會前途の事業は猶遠遠にして、會員の奮起を望まざるべからずと。畢つて通俗講演會及び學術講演會を、神田一ツ橋外帝國大學講義室、其の他二ヶ所に開かれ、通俗講演會に於ては、工學士高井助太郎氏の「我

國に於ける機械的工業」、「アンヂエニユール・デ・ザール・エ・マニユフアクチユール」山口半六氏の「市區改正の話」、工學士高峯讓吉氏の「應用化學の實例」、理學士倉田吉嗣氏の「東京給水工に就きて」の講演あり。學術講演會に於ては、工學士田邊朔郎氏の「琵琶湖疏水工事」、工學士清水保吉氏の「工學者の職業」、工學士下瀬雅允氏の「急性爆烈薬の話」、小鹿島果氏の「東洋石炭市況に就きて」、工學士若山由五郎氏の「らつせる氏の採銀法に就て」、理學士野呂景義氏の「鐵の話」、工學士大井才太郎氏の「電話」、工學士玉木辨太郎氏の「電信機械の話」、工學士「ドクトル」松平忠太郎氏の「實業用分析論」、理學士中澤岩太氏の「化學教育上の意見」、工學博士高松豐吉氏の「麻及び苧に就て」、工學士久留正道氏の「大日本古代建築沿革」、工學士河合浩藏氏の「今日の西洋建築」、工學博士辰野金吾氏の「伊太利亞國イスキヤ島地震建築」、工學士松尾鶴太郎氏の「軍艦の兵器裝置」、工學士進經太氏の「複式及び三次膨汽聯成機關に於ける蒸氣の働」等の講演ありて、盛會裡に散會したり。

明治二十五年一月本會役員改選に於て、子爵榎本武揚氏が渡邊洪基氏に代りて副會長に當選し、畢つて新年宴會の席上、幹事としての先生は大要左の如き演説を試み、本會役員及び會員を激勵せられたり。

昨年は本會の爲に甚だ多端なる年柄なりき、議院の焼失に始まり、濃尾の震災に終り、其の間水害あり、風害あり、本會に研究の材料を與へたるもの多し。本會は災害を未萌に防ぎ、或は其の創痕を癒すを以て任とす、故に本會は一難に遭ふ毎に必ず一益を得。然れども吾人が相共に災害なきを祈るは勿論なれば、余の茲に希ふ所は、今より本會は昨年得たる所の材料に就きて熱心に研究に従事し、益々工學の進歩と工學會の隆盛とを圖らんことを期す云々。

明治二十七年八月一日、清國との宣戰の大詔を拜するや、先生は本會々員の如きは其の學術技藝を以て軍國の事に従ふを本分なりとし、十一月本會は陸海軍兩大臣に建白書を呈し、且附するに工學會規則並に當時の會員千五百六十四人の姓名表を以てし、書中先づ工學會の創立より説き起し、其の組織並に研究科目に及び、此等研究科目に就きて陸海軍に於て調査を要するものあらば、本會々員は各自若くは委員を設けて、粉骨碎身其の事に當るべく、若し夫れ軍國の事秘密を要するもの如きは、慎みて之を守らんことを陳述したり。

明治二十八年五月、五日間に互り第二回臨時大會を大阪に開く。渡邊洪基氏委員長と爲り、大阪府會議事堂に開會式を行ひ、畢つて同議事堂に學術講演會を開き、工學士小杉轍三郎氏の「鑛業家注意すべきの要訣」、工學博士渡邊渡氏の「世界第一の金銀山」、工學士村上享一氏の「運送の話」、工學士植木平之允氏の「大阪築港」、工學士宗兵藏氏の「博物館建築の話」、「パウ・エンジエニユール」原田貞介氏の「勢多川疏水の計畫」、工學士岩垂邦彦氏の「水力電氣送達並に分配」、工學士伊

東忠太氏の「大極殿建築考證並に紀念殿建築説」、工學士高辻奈良造氏の「綿糸紡織事業の沿革を論じ併せて將來に及ぶ」、工學博士南清氏の「日本の鐵道に就て」、工學士原田虎三氏の「船用機關の進歩」の講演あり。其の聴衆の多數なりしと、工場巡覽に於ける各會社の優待至らざるなき等、非常なる成功を以て此の大會を終るを得たり。後日古市理事は之を本會の通常會に於て報告し、且附言して曰く、斯くの如く成功を收めし所以のものは、會員の奮發と委員の熱心盡力に依る所多しと雖、抑も亦京阪神地方實業家の贊助に俟つものありしに依らずんばならず、余は此の現象に於て近來學者と實業家との親和協同の度を高めたるの觀あるを喜ぶと共に、將來工學工業の愈々益々隆盛ならんことを祝して止まざるなりと。

既にして日清戰役終局を告げ、平和克復の大詔を拜するや、本會は 大元帥陛下の大御稜威を頌し奉らんことを議決し、同二十八年七月會長子爵山尾庸三氏宮内省に伺候して恭しく頌徳表を奉呈し、又明治三十三年五月十日、 皇太子殿下御結婚の大典を擧げさせらるるに際し、本會は奉祝の微意を表せんが爲、 天皇皇后兩陛下並に 皇太子殿下へ賀表を捧呈せり。

明治三十三年十二月本會を法人組織となし、定款並に規則を改め、副會長を二人としたる結果、役員改選に當り、山尾子爵會長に重任し、古市先生と辰野金吾博士副會長に就任せられ、同三十四年一月法人設立の許可を得、二月登記を了し、本會は社團法人と爲れり。

明治三十六年第五回内國勸業博覽會の大阪に開設せらるるを機とし、四月本會臨時會合を大阪に催し、中之島公園公會堂に於て通俗講演會を開き、工學士瀧村竹男氏の「紡織事業に就て」、工學博士眞野文二氏の「實業教育に就て」、工學博士渡邊芳太郎氏の「鐵の話」、工學士中川五郎吉氏の「石炭瓦斯の用途に就て」、工學士塚本靖氏の「住家の話」、工學博士的場中氏の「石炭と國家」、工學博士沖野忠雄氏の「商港に於ける荷物の揚卸に就て」、工學博士寺野精一氏の「商船の將來」、工學博士山川義太郎氏の「電力の傳送に就て」の講演ありたり。

明治四十年五月東京府勸業博覽會開設に際し、同月淺草區藏前東京高等工業學校に於て通俗講演會を開き、工學博士井口在屋氏が幻燈を以て「唧筒に就て」の説明あり、次に高田商會の厚意に依り、活動寫眞を以て米國「ウエスチング・ハウス」工場の狀況を示し、同商會技師工學士廣田精一氏の説明ありて盛會裡に終れり。

大正六年六月、會長山尾庸三子爵辭任せられたるを以て、古市副會長を會長に補選す。尋で同月臨時總會を開き、山尾前會長の頌表並に定款と規則の改正を議決し、十一月古市會長は自ら子爵に面して金牌と感謝狀とを贈呈せり。

感 謝 状

工學會々長工學博士古市公威本會々員を代表して謹みて子爵山尾庸三閣下に白す閣下夙に英國

に學びて工學の蘊奥を究め歸朝後専ら力を工學の振興に致して我が國工業界の元勳たり明治十二年本會の創立せらるるや閣下之を指導し之を援助し以て本會の基礎を確立せらるる尋て會長の任に膺り會務を總攬せらるること實に三十有六年の長きに及び其間銳意會員を誘掖して益々本會の發展を圖らる爾來會運駸々として進み同志の士翕然として之に加はり名を會員に列する者實に二千名を超ゆ本會が此の隆盛の域に達したるは偏に閣下が會長として努力せられたるに由らざるばあらず今や閣下本會々長の任を辭して老を養はんとするに當り茲に記念として金牌を贈呈せんと欲す區々たる薄儀焉んぞ閣下積年の功勞を顯彰するに足らんや聊か以て我等が欽慕景仰の微忱を表するに過ぎず冀くは閣下之を領せられんことを公威頓首再拜

大正六年十一月

工學會々長工學博士 古市公威

是より先山尾會長は多年役員會等に出席なく、恰も名譽會長の如くなりしが、先生今や名實共に會長たるに及びて、益々本會の進展策を講ぜられ、新に各専門學會及び協會聯合の「エンジニアリング・スタンダード・コムミッター」を組織し、(一)度量衡並に工業用材料及び機械類の統一、(二)本邦工業教育制度の改善、並に(三)戦後工業發展策に關し、各委員を設けて之が研究に着手せんとを提案せられたり。是時に當り大正六年十一月、農商務省商工局長より本會に對し、工業用材料及び機械類統一の件に關して(一)其の形狀寸法等を統一するとせば、其の着手の順序、(二)現行度量衡の不統一を整理する爲、若し部分的(例へば鐵道又は電氣事業の如き)に統一を行ふを便利とすれば、其の着手の順序、(三)其の他參考となるべき事項を諮問せられたり。然るに本會に於ては右諮問案と同一の事項に關し調査中なるを以て、該調査機關の審議を経たる成案を本會の意見として提出するを穩當と認め、古市會長は此旨を以て回答せられたり。

大正七年三月、特許局長より本會に對し、特許法、實用新案法、意匠法及び商標法、其の他關係法令の改正に關する意見を求め來れるを以て、古市會長は委員を選びて研究したる結果、到底短時日間に具體的改正意見を立案し難きを以て、此際政府自ら右改正に關し權威ある調査委員會を組織し、慎重に討究審議せらるるを最善の方法なりとし、七月此旨を回答すると共に、參考として(一)特許局の獨立、(二)工業所有權を産業所有權と改むること、(三)現行特許法及び實用新案法運用上の改善、(四)發明者權利の擴張、(五)特許登録の時期、(六)無効審判請求の期限、(七)産業所有權係争に關する最高審判機關、(八)權利範圍に關する確認審判の改正、(九)最先發明者と最先出願者との關係に付き精細審議を重ねられたしとの希望意見を提出せられたり。其の後大正九年一月、農商務次官は特許法改正案を示して本會の意見を問ふ所あり、五月古市會長之に答申するに、大體に於て改正案に異議なきを以てし、且特許事務は正確敏活を要するが故に、特許局は大いに其の機關を擴張し、之を獨立官廳とせられんことの希望を述べられ、尋で諮問せられたる實用新案法、商標

法及び意匠法は、大正十年二月其の調査の結果を農商務次官に答申せられたり。

是より先、本會提案の三調査事業に關し、工學會、日本鑛業會、日本鐵鋼協會、土木學會、煖房冷蔵協會、造船協會、建築學會、工業化學會、帝國鐵道協會、電氣學會、電信電話學會、機械學會、照明學會、及び火兵學會の十四學會協會に於ける委員の選定あり、大正七年六月第一回の會合を開き、古市工學會々長を座長に推し、聯合工業調査委員會を設け、前記十四學會協會選出の委員を以て組織し、(一)工業用材料並に機械類の規準に關する事項、(二)工業教育改善に關する事項、(三)工業の發達助長に關する事項を調査すること、委員は各學會協會より三名とし、隔年三月之を改選すること、本委員會に理事三名を置き、理事の互選を以て其の一名を理事長とし、理事長は一切の會務を管理し、本委員會の經費は寄附金を以て支辨すること等を定め、當日の會合に於て古市先生を理事長に推選し、他の理事二名は古市理事長の指命に依り、加茂正雄、近藤茂の兩氏就任したり。既にして本委員會に於て工業教育改善案先づ成りたるを以て、大正九年六月古市工學會々長は本委員會代表者として、該改善案を原内閣總理大臣始め各省大臣に提出せられたり。

大正八年十二月二十七日、古市先生は勳功に依り特に華族に列し男爵を授けられたるを以て、大正九年一月工學會役員會は、十四學會協會の聯合を以て先生の授爵祝賀會開催の事を議決し、同年三月各學會協會は、祝賀會協議委員を選び、諸般の準備を整へ、大正九年四月二十四日、古市男爵夫

妻を小石川植物園に招請し、盛大なる祝賀會を開けり。其の席上工學博士田邊朔郎氏は、男爵の功績を讃へて祝辭を述べられ、又祝賀會委員長石黒五十二博士は、當日の來會者を撮影せる寫眞二葉、及び岡田三郎助氏揮毫の男爵夫妻の肖像額面を贈呈することを報じて、非常なる盛會裡に散會し、尋で大正十年七月、肖像畫を古市先生に贈呈せり。

是より先、時勢の進歩と工業の發展は、各専門分科の細別に互りて研鑽するの必要を生じ、明治十八年日本鑛業會の成立あり、是れ實に工學所屬の學會に關する専門分業の嚆矢とす。次で翌明治十九年には造家學會即ち現時の建築學會、明治二十一年には電氣學會、明治三十年には造船協會及び機械學會、翌三十一年には工業化學會の相前後して創立せらるるあり、越えて大正三年、土木學會の設立を見るに至り、各分科學會成立し、工學會には新に入會する者少なく、却つて漸次退會者を増すの狀勢となれり。然れども工學全般の進歩發達を期待するには、各學會に於て專攻するの外、聯合して共同研究を要する事項頗る多く、相頼り相助けて検討する爲、本會の如き綜合的機關の必要あるは勿論、殊に御下賜金拜受の名譽を有する本會を解散するが如きは眞に恐懼の至りに堪へざるを以て、古市會長は之れに善處すべく深く苦心せられ、大正七年五月の役員會に於て、組織を改善して本會を維持する方法調査の爲、丹羽鋤彦、加茂正雄、上野景明、舟橋了助、近藤茂、佐野利器、清水三貞、末廣恭二の八氏に調査委員を委嘱し、大正八年三月古市會長自ら之に加はり、且

本會創立者たる辰野金吾、石橋絢彦、曾禰達藏、高峯讓吉、小花冬吉の諸氏、及び長老たる藤田重道、眞野文二、淺野應輔、笠井愛次郎、玉木辨太郎、福田馬之助、久米民之助、吉村長策、石黒五十二、高松豊吉、渡邊渡、日下部辨二郎、寺野精一の諸氏にも委員を依頼し、委員總數を二十七人に増し、本會を永久に維持する善後策に就き慎重審議を重ねたる結果、大正九年一月臨時役員會に於て工學會新定款案及び新規則案を定め、同年三月古市先生授爵祝賀に關する協議會の席上、十四學會協會委員に工學會改革案を内談して豫め諒解を得、大正十一年一月の本會總會に於て改正定款を可決し、直ちに文部大臣に之れが認可を申請し、同年八月其の認可を得て全く組織を變更し、茲に工學會は各學會の綜合團體となりて個人會員を有せざるものとなり、社團法人日本鑛業會、同日本鐵鋼協會、同土木學會、同造船協會、同建築學會、同電氣學會、及び火兵學會、煖房冷蔵協會、工業化學會、電信電話學會、機械學會、照明學會の十二學會の法人若くは代表者を以て組織し、日本工學會と改稱し、會長を理事長と改め、爾來古市先生は理事長として薨去に至るまで在任せられたり。

今本會組織變更前に於ける學術研究の状況を見るに、初め明治十四年會誌第一卷を上梓せしより、大正十年十月に至りて第四百五十二卷を發行するの盛大なるを來し、此間工學全般に互れる研究論說を會誌上に詳述し、國家に貢獻したる所實に尠少ならず、且之を學術講演に見るに、古市先生の信濃川改修問題を始め、多數の會員は本會通常會に於て、各專攻學科に就き有益なる講演を爲

し、又は本會に寄稿して嶄新なる研究を發表し、或は重要なる工事成績を報告する等、其の多くは會誌に掲載せられたり。而して本會は此等の講演及び論文中優秀なるものを選び、銀牌若くは物品を贈呈して之を表頌せり、此表頌は明治三十七年七月高峯讓吉博士の「タカチアスターゼ」及び「アドリナリン」と、下瀬雅允博士の「下瀬火藥」の講演に對して贈呈せしを始とし、明治三十九年以後は、毎年詮考して優秀なるものを選び表頌せしが、大正六年までに其の數實に三十四篇の多きに達せり。

組織變更後の日本工學會は個人會員を有せざるに至り、會誌發刊論文表頌等を行はざるも、國家的且綜合的なる工學關係事業の進歩改善に向つては、着々として施設の歩を進め、其の既に實行せられたるは(一)日本工學會大會、(二)萬國工業會議、(三)明治工業史編纂の完成を始めとし、調査事項にありては商工省委嘱の「メートル」法に據る「ポケット・ブック」の編纂、萬年會寄贈工業奨勵資金に據る金屬材料のX線的試験の研究補助、上水協議會委嘱の水道鐵管及び附屬品標準型の調査を了り、又對外的には中華民國工程師學會々員を本邦に招待して工學上の研究を交換し、工業上の施設を紹介し、今後相互の聯絡を完うせしめたるが如き、孰れも工學工業全般の發達に對する適切なる事業を施行せり。

水道用鐵管及附屬品標準調査 是より先、本邦水道用鐵管に關し其の標準一定せざりし爲、大正

二年上水協議會代表阪谷東京市長より水道鐵管及び附屬品標準型の調査を本會に依頼し來りたるを以て、本會は直ちに之れが調査委員を設け、古市副會長其の委員長と爲り審議の結果、大正三年六月、各種水道鐵管及び附屬品形狀並に名稱の一定、及び其の標準仕様書を議定して之を上水協議會代表者に送附せり。其の後再び上水協議會の委嘱に依り、米突法に據る水道鑄鐵管寸法及び重量、量水器、其の他の規格、並に耐震繼手の調査を爲すこととなり、委員長中島銳治博士外十一人の委員を設け調査中、中島博士の薨去に依り、同十四年四月、中山秀三郎博士其の後任として委員長と爲り、更に七名の委員を加へ、爾來屢々委員會を開きて、米突法に據る鐵管の寸法重量を始め量水器主要寸法、水道用鉛管、翼車式量水器の規格、水道用鑄鐵管並に異形管規格の追加及び修正を審議し、異形管の種類及び範圍を擴くし、殊に水道用鑄鐵管仕様書等は、斯界に最も權威あるものたらしめんが爲、常に商工省規格調査會と連絡を取り、意見の交換を行ひたる結果、本會決議事項は全部調査會の採用する所となり、最後に耐震試験の報告案を審議し、昭和三年三月中山委員長より調査委員會經過報告を提出せられたり。此審議中、古市先生は屢々委員會に出席せられたるが、今や經過報告書を接手せられ、本調査會の多年に亘る審議、殊に商工省規格調査會と連絡を取りつゝ進行したる事績に對し、深く感謝の意を述べられたり。

明治工業史の編纂

大正五年工學會の事業として「明治工業史」の編纂を企畫し、會員の賛成を

求めて寄附金の募集に着手し、大正六年一月の本會總會に於て、古市副會長は其の經過を報告せられたるが、時に會員工學博士田邊朔郎氏は、特に京都より來りて本總會に列席し意見を述べて曰く、明治工業史編纂の事は余が二十年來の宿志にして、今日に至る迄獨力之に従事し來れり。抑も此事たるや、明治三十三年蘇格蘭に於て舊師「ダイヤ」先生に物語りたるに始まり、歸朝後徳川慶喜公、山縣有朋公、伊藤博文公等の賛成を得て、既に卷頭を飾るべき諸公の題字を授けられたり、而して茲に工學會に於て企圖せられたる明治工業史編纂事業は、其の趣旨に於ても、其の書名に於ても、期せずして余の執筆中のものと一致せるを以て、余は自ら編纂者の一員として努力すべしとて、當日出席會員の注意を惹くこと多大なるものありき。斯くて該事業は田邊博士編纂委員長の任に當り、多數の會員委員となりて各専門事項の編輯を分擔し、出版費に就きては古市先生の盡力に俟ち、啓明會より資金の補助を得、大正六年七月著手し、其の分科を土木・地學・火兵・造船・建築・鑛業・工業化學・電氣・鐵鋼・機械の十分科とし、各科に擔任幹事を置き、編纂囑託委員總數一百餘名の多きに及び、此間工學會は組織を變更して日本工學會となりしも事業を繼續し、編纂委員は終始一貫熱心事に當り、廣く資料を蒐集し、總會、分科幹事會、分科委員會等、數十回の會合を重ね、工業化學篇を最初の出版とし、造船・鐵道・建築・土木・地學・火兵・鑛業・電氣・鐵鋼の諸篇順次之に次ぎ、機械篇を最後として出版を了し、總經費高金四萬六千九百餘圓を費し、昭和六年五月に至り全部十

一篇十冊の完成を告げたり。田邊編纂員長其の書後に題して曰く、
 明治工業史全十冊、即ち工業化學・造船・鐵道・建築・電氣・土木・火兵・鐵鋼・鑛業・機械及び地學の
 十一篇より成り、之を統ぶるに提要を以てし、又總索引を附したり。

余の思ひ立ちて本史編纂に着手せしは明治三十三年のことなりき。然るに夫より十有六年後の
 大正五年に至り、工學會に於て此議起り、其の編纂委員長たるの依囑を受けたり。依て一百餘名
 の編纂委員を囑託し、爾來年を閲すること九にして、其の第一篇を上梓し、更に復た八閱年、篇を
 重ねて爰に漸く完成を見るを得たり。

古市理事長の終始一貫して盡力せられしは、本史完成上多大の功績たり。(下略)

惟ふに本書の編纂は、工學會の一大事業たるのみならず、實に明治史上異彩を放てる大著述にし
 て、田邊編纂委員長以下編纂委員諸氏の勞を多とすると共に、當初より督勵努力之を完成せしめら
 れたる古市先生に對して、其の功績を永遠に録せざるべからざるなり。

中華工程師學會々員の招待 先生夙に世界の大勢に鑑み、東洋に於ける日華兩國民が相提携し
 て工學工業の進歩發達を圖るを急務なりとし、中華民國の工學工業に關係ある人士を會員とする
 中華工程師學會々員を本邦に招待し、相互に工學上の所見を交換し、且本邦に於ける工業の諸施設
 を紹介すると共に、今後の聯絡を全うし、以て斯界に貢獻する所あらんが爲、大正十三年八月書を

中華工程師學會々長顏德慶氏に裁して、同會々員の來朝を勸誘せられたるに、顏氏は大いに其の趣
 旨に賛同し、直ちに會員中より志望者を募集し、十月初旬將に北京を出發せんとするに當り、偶々
 國內に動亂起りて其の期を延ぶるの止むを得ざるに至れり。越えて大正十四年三月工程師學會は
 規定に依り役員の改選を行ひ、鄭孫謀氏新に會長に就任せられしが、顏前會長の計畫を踏襲して有
 志二十六名を得、漢粵川鐵路督辦關慶麟氏を團長として視察團を組織し、同年九月東京に來着した
 るを以て、同月十三日、日本工業俱樂部に迎接會を開き、中華民國代理公使張元節氏以下同公使館
 員も之に臨み、劈頭古市工學會理事長は歡迎の辭を述べ、團長關慶麟氏の答辭あり、次に子爵後藤
 新平氏、及び張代理公使の祝辭あり、主客歡談を交へ、和氣藹々裡に散會せり。

九月十四日一行は各工場見學の後、理化學研究所に會合して、各研究室を巡覽し、同夜帝國ホテ
 ルに於ける工學會主催の晚餐會に臨めり。席上古市理事長の歡迎辭に次ぎて、關團長の謝辭、棚瀬
 商工政務次官、矢吹外務政務次官、張代理公使等の演説ありて盛會を極め、翌十五日復興局區劃整
 理の實狀視察の後、東京帝國大學講堂に日華共同の講演會を催し、斯波招待委員長の開會の辭あり
 て講演に移り、商工技師工學士小西正二氏の「工業品規格統一事業に就て」、前漳厦鐵路局々長工
 程師王靖先氏の「京綏鐵道自修の狀況」、鐵道技師工學博士那波光雄氏の「日本に於ける鐵道渡し
 に就て」、京漢鐵路工務處々長王壽祺氏の「鐵路技術の統一」、東京帝國大學教授工學博士大島義清

氏の「本邦瓦斯事業の概要」、漢粵川鐵路督辦關廣麟氏の「技術人材の養成」、東京帝國大學工學部長工學博士倭國一氏の「本邦工業教育に就て」の有益なる講演を終り、斯波招待委員長の閉會の辭を以て散會し、一行は同夜紅葉館に於ける鐵道大臣の招待晚餐會に臨めり。

九月十六日以後は、東京・横濱・名古屋・京都・奈良・大阪・神戸・門司・若松等に於ける各地の工場を視察し、十月五日山陽ホテルに於て工學會主催の晚餐會あり、主客交々所感を述べ、歡聲堂に溢れて盛況裡に解散し、即夜遠來の一行は盡さぬ名残りを惜みつつ、釜山に向つて歸國の途に就きたるが、其の發するに臨み、關團長は感謝狀を古市理事長に贈り、一行歸國の後、中華工程師學會々長鄭孫謀氏よりも亦鄭重なる感謝狀を古市理事長に贈呈し、其の書中、將來更に相互間の往來を頻繁にし、技術上提携を圖り、親善の實を擧ぐるを得ば、是れ實に閣下及び貴會諸友の功績に外ならずとて、更に今後の期待を述べたり。

日本工學會大會 大會開催の議は大正十五年五月の評議員會に於て、評議員日本鑛業會代表倭國一氏より日本工學會は近く世界的萬國工業會議を主催すると共に、内地の工業家工學者の大會を少くとも三年に一回開催することとし、特に其の第一回は萬國工業會議の準備の意味に於て、成るべく最近に之を開き度しとの提案出でたるに始まり、明年十一月三日明治節の吉辰を期し、同日より五日間、工學會々員たる各學會聯合の日本工學會大會を開くことを決し、古市理事長は俵理

事と共に専ら斡旋せられ、各學會より二名宛の實行委員の選出を求め、昭和二年七月第一回委員總會を開きて、實行方法の大綱を協議し、實行委員長に俵理事を推し、大會々場を東京帝國大學大講堂と定め、日本動力協會の企畫に係る日本動力會議とも協議を遂げ、諸種の準備を整へたるが、大會出席申込者は總數四千六百八十五名に達し、十一月三日の大會當日、大講堂内は一般聽講者を容るるの餘地なきに至れり、午前十時古市理事長の閉會の辭に次ぎ、中橋商相、水野文相、古在東京帝國大學總長、塚本東京帝國大學工學部長の祝辭、子爵大河内正敏博士の「基本工業概論」の講演あり、午後は各學會代表の工業各分科發達の狀況講演あり、理事種子田右八郎氏の閉會の辭を以て午後五時終了し、三日及び四日は大講堂の階上階下及び屋外に國産品展覽會を開き、四日及び五日は大會部會として各學會大會を開き、五日及び六日の兩夜は通俗講演會を開きたるが、孰れも皆滿員の盛況を呈し、又四日夜東京中央放送局よりの記念放送は、鐵道大臣子爵井上匡四郎氏の「本邦の工業界」と題する講演にして、工學の各方面に互る現代の傾向を通俗的に而も趣味津津たる言辭を以て説明し、聽取者に我が工業の趨勢を知らしめ、六日及び七日の各所の見學には到る處優遇を受け、殊に二千餘人の新宿御苑拜觀者には、平素開放せられざる區域をも拜觀を許されたるが如きは本會の感激に堪へざる所なりき。斯くて大會は非常なる好成绩を以て終了を告げ、工學會組織變更後の事業として、劈頭第一の記録を留むるに至れり。

右大會に於ける國產品展覽會は、第一部機械、器具、化學工業、冶金製品、第二部建築及び衛生工業材料其の他を陳列したるが、出品者は理化學研究所外六十ヶ所に及び、其の出品は光學器類、顯微鏡、高溫度計、電氣計器、電熱線、輕合金、耐酸鐵等、歐洲大戰中輸入杜絶の爲、在來の輸入品に對し新に國産として發展したるもの多きを占めたり。

又部會にありては、論文百七十篇に達し、本大會の豫期したる綜合的知識交換の目的を達し、通俗講演會は、陸軍航空兵中佐安達堅造氏の「飛行機」、東京帝國大學教授厚木勝基氏の「人造絹絲」、東京市電氣局工務課長安倍邦衛氏の「地下鐵道」、東京帝國大學教授佐野利器氏の「地震と建築」、陸軍砲兵大佐久村種樹氏の「化學兵器と都市防護」、逓信省工務局技師中田末廣氏の「自働電話交換」等、現代工業の粹を極めて通俗的に講演せられ、講堂立錫の餘地なき來聽者に多大の利益と知識を與へられたり。

之を要するに第一回日本工學會大會は、國內各方面の工學者及び技術者間の連絡協調の機運を醸成し、本邦の工學工業の進歩發達を促し、又將に開催せられんとする萬國工業會議の準備として、豫期以上の成功を收め得たり。

斯くの如く、第一回日本工學會大會は多大の成功を收めて、工學及び産業の發展に貢獻する所顯著なるものありしを以て、昭和六年三月の評議員會に於て、第二回大會を明年春期に開催する事を

議決し、次で七月古市理事長は各學會より選出の二名宛の委員に大會委員を委嘱し、委員總會に於て平賀讓氏を委員長に、佐野秀之助氏を副委員長に推し、大會々場は東京帝國大學大講堂、部會は同大學講義室を以て之に充つるに決し、之れが準備を進め、昭和七年四月五日より九日に至る五日間の大會開催を見るに至れり。

大會第一日の四月五日は、大學大講堂に總會を開き、滿堂餘席なき大盛況裡に古市理事長開會の辭を述べ、次に鳩山文相及び前田商工相の祝辭代讀あり、終つて十二學會代表者の講演あり、日本鑛業會々長工學博士桂辨三氏の「本邦鑛業の特性」、日本鐵鋼協會前會長工學博士今泉嘉一郎氏の「本邦製鐵事業の今日と將來」、土木學會副會長工學博士大河戸宗治氏の「鐵筋コンクリートの將來」、火兵學會々長海軍中將波多野貞夫氏の「産業合理化と火兵學會」、造船協會々長工學博士今岡純一郎氏の「我邦造船の現在と將來」、建築學會々長工學博士大熊喜邦氏の「本邦建築界最近の狀況」、工業化學會商議員工學博士莊司市太郎氏の「本邦に於ける化學工業の現状と其將來」、衛生工業協會々長北浦重之氏の「衛生工業發達の趨勢」、機械學會々長工學博士朝倉希一氏の「本邦機械工學及工業の最近の進歩」、電氣學會々長工學博士納富磐一氏の「電氣工學最近の趨勢」、電信電話學會々長大畑源一郎氏の「電氣通信の現在及將來」、照明學會々長工學博士鯨井恒太郎氏の「照明工學最近の狀態」に就きて講演あり。畢つて平賀委員長は古市理事長に代つて閉會の辭を述べ、茲

に總會は盛會裡に終了せり。

國産品展覽會は、陳列場を大學大講堂、工學部新館並に大講堂前廣場に設け、百十一ヶ所より出陳せられたる優秀國産品を展覽に供し、殊に六日及び七日は會員外の一般公衆に公開し、最近進歩したる機械、器具、材料及び研究參考の資料等は、觀衆に對して多大の裨益を與ふるものありたり。各部會は四月六日及び七日の兩日、大學構内の法・經・文・工・四學部の諸講義室に於て開かれ、論文總數は三百四十七篇の多きに達し、何れも有益なる研究を發表せられ、聽講者滿員の盛況を呈し本大會の豫期したる総合的知識交換の目的を達し得たるは喜ぶべく、古市理事長も各部會を視察し、其の盛況に満足せられたり。

本大會開催を機とし、工業知識の一般普及、工業及び工業の文化に對する貢獻の認識、若き學徒の工業に對する愛好心の振興に資せんが爲、講演の無線放送と通俗講演會の公開を行ひ、四月六日大會委員長海軍造船中將平賀讓博士は「我が工業界の現状」と題する講演を東京中央放送局より放送せられたり。本講演は我が國工業の各方面に於ける現今進歩の状況、之に對する當事者の苦心、及び我が工業の趨勢を説明し、併せて本工學會大會を紹介せられたるものにして、同博士の明快重厚なる言辭は、幾萬の聽取者に深き感銘を與へたり。通俗講演會は四月八日九日の兩夜、東京朝日新聞社講堂に於て公開せられ、八日は東京帝國大學教授工學博士鯨井恒太郎氏の「光線を利

用する電話」、同工學博士龜山直人氏の「空氣より窒素肥料製造の話」、東京工業大學教授工學博士小林政一氏の「將來の住宅」、東京帝國大學教授工學博士加茂正雄氏の「文化の發達と機械工學」、南滿洲鐵道會社技術局次長工學士根橋禎二氏の「最近の滿蒙に於ける鐵道に就て」、海軍造船中將工學博士平賀讓氏の「帝國軍艦の進歩」、海軍造兵少佐工學士橋口義男氏の「最近の飛行艇」の講演あり。講演者は實驗、活動寫眞、幻燈、掛圖を以て説明せられ、滿堂の聽講者に多大の感動を與へたり。

四月八日九日の兩日は見學に充て、八日は特に新宿御苑を拜觀し、其の他は内務省土木試驗所、理化學研究所、帝國議會議事堂建築場を始め、川崎市・横濱市・埼玉縣大宮町等の各製造所鐵工所等、合計四十ヶ所の見學を了し、茲に第二回大會の終局を告げ、第一回大會と同じく、工業及び技術の進歩、並に産業の發展に貢獻する所多大なるものありたり。

日本工學會館の建築 是より先古市先生が日本工學會更生の一施設として計畫せられたるは、同學會々館の建築にして、我邦の工業、工業及び工藝を振起する爲、十二學會を社員とする會館を建設し、之を社團法人と爲し、社員たる學會に對し、事務所研究所等を供與するの外、講堂、圖書室、其の他共通の設備全部を完備せんとするにありて、大正十四年一月以來の計畫に係り、各學會より建築調査委員を選出し、機械學會の島安次郎博士委員長と爲りて調査を進め、定款を起草し、同年二

月、各學會に對して中間報告を爲し、其の賛否を求めたるに、概ね賛意を表し、照明學會及び建築學會に多少意見の相違ありしも、調査委員會は尙其の歩を進めて、同年五月末日に於ける各學會々員數及び會費收入額を標準とし、會館建築豫算工費に對し、日本工學會金貳拾萬圓、建築學會金參萬參千圓、日本鑛業會金壹萬壹千圓、工業化學會金貳萬圓、日本鐵鋼協會金九千圓、電氣學會金參萬九千圓、土木學會金貳萬圓、電信電話學會金八千圓、火兵學會金參千圓、機械學會金參萬圓、煖房冷蔵協會金五千圓、照明學會金九千圓、造船協會金壹萬參千圓の割當額を豫定し、尙社團法人實行の順序、手續、其の他附帶事項等に關し協議を遂げ、同年九月建築調査委員より協議の要領を古市工學會理事長に報告したり。尋で昭和二年に至り、前記割當寄附金募集趣意書成りしを以て、古市工學會理事長を代表とし、各學會々長連署、之を印刷したるも、諸種の事情に餘儀なくせられ、未だ實行を見ずして今日に至れるは遺憾なりと謂ふべし。

三、萬國工業會議

萬國工業會議は、大正十四年三月、米國工學界の重鎮「エルマー・エー・スペリー」博士より我東京帝國大學教授加茂正雄博士に對し、今後五ヶ年以内に日本に於て開催せられんことを慫慂し來れるに基因し、加茂博士は之を古市日本工學會理事長に謀りたり。古市理事長は評議員會を開きて、日本工學會が會議の主催者たるの方針を定め、資金其の他の點に於て政府の援助を求められしが、大正十五年十月若槻總理大臣は古市理事長以下學會實業界の有力者を官邸に招きて、政府に於ても本計畫に協賛し、金拾五萬圓以内の補助金を支出すべく閣議に於て決定したる旨を披露し、關係者は勿論、官民一致して之れが實現を期せんことの希望を述べられたり。是に於て昭和二年一月、日本工學會會員たる十二學會の幹部、各方面の有力者、及び諸團體の代表者等、合計百拾五名の準備委員を設け、三月第一回準備委員會を開き、古市理事長を準備委員長に推し、更に會議の組織を定むる特別委員三十五名を指名決定し、眞野文二氏を特別委員長に委囑し、萬國工業會議規則を起草し、九月の第二回準備委員總會に於て該規則を可決確定したり。是より先、第一次豫告を内地及び諸外國に配付し、日本工學會主催となり、昭和四年十月下旬より二週間に亘り、萬國工業會議を東京に開催すべき旨を宣言し、此の會議に於て工學及び工業に關する萬般の問題を討議し、各方面の研鑽に對する國際的協力を助成増進し、併せて全世界の工業關係者間に於ける親善の誼を深厚ならしめんことの目的を聲明せり。

昭和二年十二月準備委員會は、新に三百七十名の評議員を選定委囑し、後之を五百名に増員し、

茲に萬國工業會議評議員會の設立と爲り、重要な事項は評議員會に於て議定することとなるを以て、準備委員會は解散せられ、評議員會が執行機關の母體と爲り、昭和三年一月第一回評議員會を開き、諸規則を審議したる後、古市公威男を萬國工業會議會長に、斯波忠三郎男、團琢磨男、商工次官四條隆英男の三氏を副會長に推薦し、委員の部署を、總務・計畫・資金・論文・會議・編纂・見學・接待の八部に分ち、各其の委員を囑託し、二月事務所を丸ノ内日本工業俱樂部に設けたり。

尋で同年六月に至り、名譽會長に内閣總理大臣、名譽副會長に商工大臣及び子爵澁澤榮一氏、顧問に商工大臣以外の各省大臣、帝國學士院長、各帝國大學總長、早稻田大學總長、貴衆兩院議長、東京市長、日本商工會議所會頭、及び清浦奎吾伯其の他の八長老、名譽員に工學又は工業に名聲顯著なる朝野の學者實業家四十二名を推薦し、總裁には特に 秩父宮雍仁親王殿下を推戴し奉りしに、幸に御聽許あらせられたるを以て、七月二十六日殿下の台臨を仰ぎ、日本工業俱樂部に於て奉戴式を舉行し、古市會長の御禮言上ありて、總裁宮殿下の優渥なる令旨を賜はり、式畢つて殿下御臨席の下に午餐會を開き、田中内閣總理大臣の發聲にて、一同殿下の御健康を祝して乾杯したり。次に同年十二月、日本工學會を組織する十二學會の會長、及び新に商工次官に就任せし三井米松氏を副會長に推し、昭和四年十月會議開催の時に當り、外國代表中より米・英・伊・獨・佛・中華・露・瑞典・丁抹・白耳義の名士十人を名譽副會長に推薦したり。

又會務に關しては總務委員長に男爵斯波忠三郎氏、計畫委員長に加茂正雄氏、資金委員長に大橋新太郎氏、論文委員長に俄國一氏、會議委員長に稻田三之助氏、編纂委員長に那波光雄氏、見學委員長に初は八田嘉明氏、次に青木周三氏、接待委員長に初は門野重九郎氏、次に井坂孝氏を推し、地方委員會長には横濱に山縣治郎氏、愛知に初は小幡豐治氏、次に岡正雄氏、京都に土岐嘉平氏、大阪に湯川寛吉氏、神戸に鹿兒房次郎氏、朝鮮地方委員主務に岩崎眞雄氏、滿洲地方委員主務に貝瀬謹吾氏を委屬せり。

本會議の主要目的たる論文に關しては、計畫委員會及び論文委員會に於て熟議したる結果、左の二十三種に分てり。

1. General Problems Concerning Engineering.
2. Engineering Science.
3. Precision Machines and Instruments.
4. Architecture and Structural Engineering.
5. Public Works.
6. Railway Engineering.
7. Transportation.
8. Communication.
9. Power.
10. Electrical Engineering.
11. Illuminating Engineering.
12. Mechanical Engineering.
13. Refrigerating Industry.
14. Textile Industry.
15. Shipbuilding and Marine Engineering.
16. Aeronautics and Aeronautical Engineering.
17. Automotive Engineering.
18. Chemical Industry.
19. Fuel and Combustion Engineering.

20. Mining and Metallurgy. 21. Engineering Materials. 22. Scientific Management.
23. Miscellaneous.

以上の種別は大體論文の範圍を示し、指定論文と任意論文とに分ち、日・英・佛・獨語の一を以て記述し、一篇を八千語以内とし、提出期限を昭和四年四月一日と定めたるが、期限内に集まれるもの八百二十五篇の多きに達し、論文委員會の審査の結果、採用に決定したるもの八百十三篇、此の内譯外國よりのもの四百四十二篇、内國のもの三百七十一篇なりき。

總務に屬する事項に就きては、曩に第一次豫告を以て萬國工業會議開催の事を宣言したるが、昭和三年八月第二次豫告を以て、會議の組織、日程、會員參加に關する事項、論文、見學、その他一切の事項を記載して外國各方面に配布し、同年十月には「萬國工業會議」と題する豫告書を内地各方面に配布せり。又前記二十三種の論文を専門部類別とし、之を十二部會に配屬して討論することとしたり。即ち第一部會は工業一般及び雜件(論文種目1, 23)、第二部會は工業科學、精密機械、航空及び工業材料(2, 3, 16, 21)、第三部會は建築及び構造工學(4)、第四部會は土木(5)、第五部會は鐵道及び運輸(6, 7)、第六部會は通信(8)、第七部會は動力、電氣工學及び照明(9, 10, 11)、第八部會は機械工學、冷凍、紡織及び自動車(12, 13, 14, 17)、第九部會は造船及び船用機關(15)、第十部會は化學工業、燃料及び燃焼(18, 19)、第十一部會は鑛山及び冶金(20)、第十二部會は科學的管理

(22)とす。

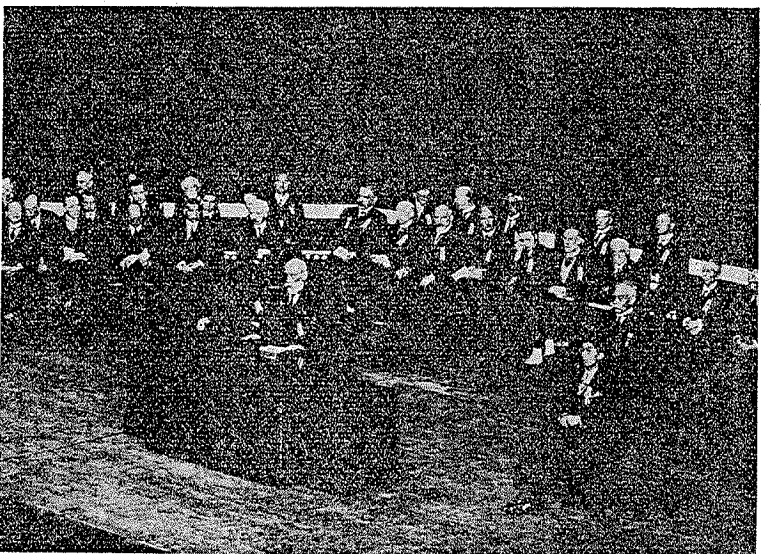
會員は内外公共團體の代表、名譽員、賛助員、正會員、準會員及び客員の六種に分ちたるが、海外會員の參加勧誘に就きては、昭和二年歐洲に開かれたる世界經濟會議、昭和三年の萬國化學會議、及び世界動力會議を好機として力を致し、別に「Japan and Industry (日本と工業)」と題する小冊子を諸外國各方面に配布して日本を紹介したるが、流石に米國は本會議當初の勧誘者として直ちに準備委員會を組織し、「スペリー」博士委員長と爲り、後の大統領にして當時の商務卿たる「フーバー」氏を名譽委員長とし、本會議參加の議を進め、其の會員數は海外會員の筆頭たる三百七十四名を算するに至り、獨逸・英吉利・瑞典・丁抹等に於ても、亦參加準備委員會を組織する等頗る熱心を極め、米國に次ぎ英國の百二十二名、中華民國の百九名、獨逸の八十六名、伊國の八十二名、佛國の三十六名、瑞典の二十九名等、海外會員千二百八十五名、參加國の數四十二に及び、本邦人會員三千二百十名を合して總數四千四百九十五名の多きに達したり。

接待委員會及び見學委員會は、外國會員の便宜を謀り、諸種の觀光計畫を立て、編纂委員會は、豫め本邦工業に關する知識を海外會員に與ふる爲、英文の「Industrial Japan (工業の日本)」を印刷して配布し、且見學旅行の爲に英文の「旅行案内」及び「奈良京都の古美術建築案内」を刊行せり。

又資金委員會に於ては、政府の補助金拾五萬圓以外に約貳拾萬圓の寄附募集を爲さざるべから

ず、仍て古市會長及び斯波副會長は、自ら名古屋・京都・大阪・神戸等に出馬し、官公署、商工會議所、工業關係有力者を歴訪して、資金募集の件、並に本會議の實行計畫に就きて助力を求めたるに、東京・横濱は勿論、各地に於ても熱心に此舉に賛同し、募集資金貳拾七萬餘圓に達し、豫期以上の成績を収め、會費其の他の収入を合算すれば、本會議の資金として大約四拾八萬餘圓を計上し得べき確信を得たり。

是に於て昭和四年七月三日、本會幹部は本會議開催準備狀況の報告を兼ね、外人參加に關し打合せの爲、本邦駐在各國大使公使二十二名を主賓とし、内外名士を招待し、日本工業俱樂部に於て午餐會を催せり。忝くも總裁宮殿下台臨を賜はり、デザートコースに入るや、古市會長は先づ殿下の御健康を祝し奉り、次に今日迄の經過を報告して、内外關係者の盡力を感謝し、併せて本會議有終の美を濟さんが爲、更に各國大使公使の後援を希望する旨を述べ、次に總裁宮殿下は極めて流暢明快なる英語を以て、世界各國より多數の論文の寄與と多數の參列者を見るに至るべきこと、本會議の開催が世界人文の發達に貢獻する所少からざるべきこと、並に海外諸友邦の公私各方面より寄せられたる同情と協力とを感謝する旨の御挨拶あらせられ、次に英國大使「ジョン・テイレイ」卿は外國使臣を代表して答辭を述べ、總裁宮殿下の御英明を讃へ奉り且日本國民の異常なる組織力と、各國との協調技量の優秀なるを嘆稱し、本會議が必ずや偉大なる成功を贏ち得べしと結論せ



萬國工業會議會開式・向つて右前・秩父宮總裁殿下・其の右後濱口首相
中央壇に立てる古市市長

り。右終つて一同は本會議成功の爲に乾杯し、盛會裡に散會せり。

昭和四年十月二十九日午前九時、世界工業文化の精華と權威を展開する萬國工業會議の開會式は、總裁宮殿下台臨の下に、新裝成れる東京市日比谷公會堂に於て嚴肅に舉行せられ、來會者は海外四十二箇國の代表者及び會員、學界の元老、實業界の巨頭、各方面の來賓及び内地會員、合計四千餘人の多數に上れり。先づ總裁宮殿下より、工學及び工業の進歩が、世界に於ける産業の發達に貢獻する所頗る大なるものあるを以て、各國の學者實業家の隔意なき協力を必要とすると共に、産業上の國際發展及び國際通商の本義に鑑み、互に圓滿なる協調を

遂ぐるは極めて緊要にして、本會議が諸君の一致協力に依り、以上の目的に向つて人類福祉の増進に何物かを齎すべきことを祈るとの旨を賜はり、次に名譽會長内閣總理大臣濱口雄幸氏は、本會議の重要性を摘示し、政治上の國際聯盟と同じく、産業上の國際常設機關たるべきを望み、人類文化の進展に貢献し、世界平和の確保に寄與する所多大にして、産業史上に一新紀元を劃する會合なりと力説せらる。次に古市會長の挨拶ありて、本會議の成立並に目的に就きて説明し、且其の目的達成の爲、各種論文の討議が、工學の將來に裨益する所多大なるべく、將又見學旅行が我國の古文明並に現在工業の實狀を諸君の眼前に展開して、所謂科學に國境なきを證せられたしとの希望を述べられ、次に海外代表者の祝辭、及び海外各種學會、協會、大學等よりの祝文披露ありて開會式を畢れり。斯くて暫時休憩の後、古市會長は第一回總會の開會を宣言し、本會議の議事細則を討議に附して可決確定し、茲に古市會長は選ばれて總會の議長となり、十二部會の座長を指名し、次に本會議成立に盡力せられたる現米國大統領「フーバー」氏に感謝の辭を呈することを決議し、直ちに同氏に長文の電報を發して閉會を告げたり。

十月三十日より十一月六日に至る迄(但十一月二日及び三日を除く)の六日間、帝國議會議事堂の委員室に於て、十二部會は各部座長の下に開かれ、二十一箇國より提出せられたる外國人論文四百四十二篇、日本人論文三百七十一篇、合計八百十三篇は、各部會に於て著者の朗讀並に代讀あり

て、順次討議に附せらる。別に各部會室外に映畫室を設け、特種の論文には幻燈又は活動寫眞を使用し、更に陳列室を設けて、論文を説明する各種の標本及び資料を展覽に供したるが、十月三十一日午前、總裁宮殿下は部會に成らせられ、古市會長の御案内にて各部會室に臨み、論文の討議を親しく聽し召されたり。又一般公衆に對する公開講演としては、開會式の前日即ち十月廿八日、副會長斯波忠三郎男が、「萬國工業會議の大要」と題して、東京中央放送局より放送し、翌廿九日開會式當日、米國代表「ジェウエット」氏の「技術は一種の國際語」、英國代表「アレン」氏の「技術家の國際的協調」、獨國代表「マツチョス」氏の「傳統的美と文化との融合」に就きての放送あり。次に本會の主催を以て、十月三十日學術講演會、十一月一日工業講演會、十一月四日及び五日通俗講演會を公開せし外、十一月二日には日獨文化協會主催の講演會あり。又地方に於ける公開講演會は、十一月十四日各地方委員會主催の大阪講演會、及び神戸講演會あり。以上東京・大阪・神戸等に於ける講演題目並に講演者左の如し。

學術講演會 動作の研究、ギルブレス女史(米)。研究所と政府との關係、コットレル氏(米)。

國際電話、ギル氏(英)。瑞典の工業政策、エンストローム氏(瑞)。

工業講演會 科學及び工業の博物館、ミラー氏(獨)。米國に於ける産業調査組織、アレキサンダー氏(米)。英國に於ける淨水供給、ビンニー氏(英)。

通俗講演會 (其の一) 産業の合理化、ケットゲン氏(獨)。佛國産業の進歩に就いて、ド・ベルク氏(佛)。産業革命、ロト氏(米)。

通俗講演會 (其の二) 伊太利は何を爲しつゝあるか、ルイヂ氏(伊)。ソビエツト聯邦の工業に就いて、フラクセルマン氏(露)。中華民國の工業に就いて、吳承洛氏(中華)。

日獨文化協會講演會 電気工業の初期、ミラー氏(獨)。土木工業に於ける學理と實地、プロブスト氏(獨)。人間と機械、マツチヨス氏(獨)。

大阪講演會 工業教育、マツチヨス氏(獨)。天然資源の保全、スミス氏(米)。軌近造船術の發達、ヒルハウス氏(英)。

神戸講演會 新産業の革命、ロー氏(米)。能率増進と勞働熟練との満足、ギルブレス女史(米)。參會者に對する歡迎接待は、豫定の如く行はれたるが、學會、其他協會、及び個人に依つて催されたる茶會、晚餐會、園遊會、午餐會等、公私合して凡そ百回の多さに達せり。就中公會の主なるものは、十月廿八日帝國ホテルに於ける古市會長の歡迎夜會、十月廿九日開會式當日首相官邸に開かれたる濱口首相の歡迎夜會、此の夜會には、秩父宮同妃兩殿下の御台臨あり。十月三十一日午後新宿御苑に於ける 秩父宮總裁殿下の御園遊會、十一月一日東京會館に於ける 堀切東京市長の午餐會、十一月五日霞ヶ關離宮に御召の御茶會、此の御茶會には、聖上陛下の御名代として 閑院宮

殿下の御台臨あり。其他各國大使公使の茶會、晚餐會、夜會等頗る多數に上り、最後に十一月六日東京會館に於ける古市會長の送別晚餐會あり、其の席上古市會長は、世界の工學及び工業關係者が、本會議に於て親善協調の實を挙げ得たるは、滿堂諸君の好意と熱誠なる援助に依るものにして、永遠の國際的平和の確保と、人類の福祉の増進に貢獻する所尠からざる旨を挨拶せられ、英・米・佛・獨・伊・丁抹代表者の答辭ありて、盛會裡に散會せり。

十一月七日衆議院議事堂に於て、午前九時半最後の總會を開き、斯波副會長議長席に着き、會議委員長稻田三之助氏の部會々議狀況の報告ありたる後、決議委員長「エドストロム」氏(瑞典)より提出の左の三議案を可決せり。

一、本會議に列席せる各國代表は、今後各國の事情に鑑み、國際的工學聯盟を組織することの可能なるや否やを充分に調査研究し、次の萬國工業會議に其の報告を提出せられんことを希望す。

二、和蘭王立工學會の蘭領東印度部會をして、灌漑用水に關する研究を行はしめ、殊に米の栽培に關する經濟的方法に就いて研究せしむること。

三、堰堤の構造及び其の壓力に關する構造上の研究を、米國土木學會、國際河川通運會議、世界動力會議、其他諸國に於ける工學團體をして調査研究せしむること。

次に米國「スペリー」氏は決議委員會の承認を経て、左の感謝決議案を提出したるが、満場一致、拍手喝采を以て可決せり。

外國代表者は、日本政府並に工學會組織の十二學會、及び萬國工業會議各役員に對して、感謝の意を表することを議決す。

最後に斯波議長は、遙に海外より渡航せられたる名譽副會長等に對し、本會議として厚く謝意を表する旨を陳べ、總會は之を以て終了せり。暫時休憩の後、午前十一時古市會長司會の下に閉會式を行ふ。時恰も 秩父總裁宮殿下は、陸軍演習の爲廣島縣下に御出張中にてあらせられ、是日電報を以て左の令旨を賜ふ。

萬國工業會議は、開會以來諸君の熱誠なる努力に依り、多大の効果を齎らして、其の日程を終りたるを喜ぶ、茲に閉會に際し、諸君が連日の勞に對し敬意を表す。

次に米國代理大使「ネビル」氏は、曩に本會議より電報を以て、「フーバー」大統領に謝辭を呈したるに對し、同大統領よりの挨拶状を披露し、次に古市會長の挨拶ありて、本會議開會以來、豫定の日程に従ひて、何等の故障なく會議を進行し得たるは、内外會員諸君の熱誠なる贊助に依ることと深く感謝する旨を述べ、連日十二部會に於て朗讀討議せられたる論文は、工學工業の有らゆる部門に亙り、其の範圍の廣汎なること、從來の會議に其の比を見ざる所、想ふに工學の應用は、獨り産業

經濟のみに止まらず、人類の精神的及び物質的活動の全般に密接なる關係を有し、人文發達の上に如何に重大なる使命を有するものなるかを明白ならしめたる點に於て、本會議の大なる意義を諒解するを得たり。此等の論文は印刷に附して頒布し、將來長く斯界の好參考資料と爲さんと欲す。明日以後は、本州各地は勿論、朝鮮・滿洲・臺灣に至る迄、見學旅行の途に上らるることとなれり、各地方に於て迎接の準備ありと雖、ホテル其の他の點に於て、或は諸君の満足を得ざらんことを虞る、只誠意のみは之を諒承せられんことを希ふ。要するに今後益々工學及び工業關係者相互の協力に依り、國際間の産業上の協調を來し、延いて世界永遠の平和の確保に對して貢獻せんことは、即ち吾人の重大なる任務なりと信ずる旨を力説せられたり。次に米國「ジャドウィン」氏を先頭に、和蘭「クール」氏を殿陣として、十四箇國代表の演説に移り、畢つて古市會長閉會を宣し、茲に世界的大會議の終幕を告げたり。

十一月八日、見學團は豫定の日程に従ひ、各班に分れて旅行の途に上り、先づ關東方面の見學を行ひ、一たび東京に歸り、更に關西方面に向ひ、九州・臺灣・朝鮮・滿洲を見學し、十一月二十七日滿洲旅行團の大連に於ける解散を以て終局を告げたるが、此の見學旅行は、觀光以外に古來日本の文化、並に工業發達の現状を外人に紹介したる點に於て、多大の効果ありしを疑はず。此見學旅行と關聯して、本會議が京都・横濱兩市に開設したる展覽會の記事を逸すべからず。此の展覽會は工學

博士高松豊吉氏の發意に因り、京都に於ては本會議に出席せる海外代表者及び會員の爲開催せられたるものにして、横濱にては我國輸出品を紹介し、將來國産品の輸出奨勵上有効ならしめんと目的に出で、從來横濱商工會議所に於て蒐集せる輸出見本品を更に一層完備充實し、十一月二日神奈川縣及び横濱市官民一致の外國會員歡迎會開催の當日、商工奨勵館に陳列展示したり。又京都に於ては日本の古文明を紹介せんとの趣旨に出で、京都商品陳列所に於て、京都美術工藝展覽會を開き、關西方面の見學旅行を機とし、十一月十四日隨意參觀せしめたり。其の出品中には權威ある大作多く、門外不出の力作も亦尠からず、外人をして深く満足の意を表せしめたるのみならず、其の參考に資する所甚大にして、同時に將來我國の美術工藝の進展にも貢獻する所多きものあるを思はしめ、本會議をして有終の美を發揮せしめたりと稱せらる。

本會議終了の後、編纂委員會は論文の印刷に努力し、専門別に纏めて三十七卷となし、之に梗概一卷、總目次一卷を加へて、合計三十九卷とし、クロス製本として Popular Edition と稱し、分冊にして會員に頒ち、又以上三十九卷を背革製本二十冊に纏めて、之を Standard Edition と稱し、希望に應じ實價を以て頒てり。之を要するに以上の論文は、皆斯道權威者の手に成り、而も全世界の専門家が一堂に會して之を討議したることは、當に親交を厚うするのみならず、將來世界の工業の進歩發達上裨益する所多大なるものありしを疑はざるなり。

此萬國工業會議と同時に古市先生を會長として世界動力會議東京部會の開催ありたるが、共に豫期以上の成功を收めて、内外の絶大なる賞讃を博し、世界各國は我國の工業及び工業の進歩に對し、此兩會議に依つて劃期的に認識せられたることは、其の後幾多の感謝狀、並に各種の雜誌上に發表せられたるを以て知らるべく、獨逸は特に赤十字章を古市會長に贈呈して、其の偉大なる功績を讃へたり。

四、土木學會

我國工学に關する學會の來歴を考ふるに、明治十二年工學會創設の際に在りては、工学專修者少數にして、知識交換の範圍も狭く、工学關係の學科は舉げて工學會に包容せられたり。然るに時世の進歩、殊に工業の發達に伴ひ、各分科専門的に研究を要する事項著しく増加し、明治十八年日本鑛業會の成立あるや、建築、電氣、造船、機械、工業化學の諸學會相踵ぎて起る。當時に於ける工學所屬の分科を大別して七科とすれば、以上六學會以外、更に土木學會の存在を見ざるべからざるも、明治三十一年鐵道協會の新設ありて、土木科の一半を之に收容したるを以て、本會の設立は遅々として進まず、終に明治の末期に及び多數の土木科會員を有する工學會を、實質上土木學科の研

究機關と爲すべきか、若くは別に一學會を創立すべきかの岐路に立つに至れり。然れども工學會は工學全般の綜合機關として、重大なる使命を有するを以て、別に土木學會創立の必要は一般の認むる所となりしが、時恰も古市先生と沖野忠雄博士が還暦を迎へらるるを以て、之れが記念資金募集の計畫あり、乃ち此機會に於て土木學會を創立せんとの議起り、東京帝國大學教授中島銳治、廣井勇、中山秀三郎の三氏は先生を訪ひ、其の許諾を請ひたるに、先生は當時幾多の記念事業と稱して贖金を勧誘するの流弊ありしに鑑み、記念資金募集の議を肯んぜられず、而も三教授の熱心なる懇請と土木學會創設の意義は、漸く先生を動かし、他日再思熟考せられたる後、學會の爲とあらば自己の主張を迂ぐるも亦止むを得ずとして承諾を與へられたり。是に於て本會の設立と古市沖野兩博士還暦記念資金の募集とは、相前後して着手せられ、資金募集は、中山秀三郎、岡崎芳樹の兩博士之れが主任と爲り、古市先生は進んで自ら本會設立の衝に當らる。

大正三年三月、先生は石黒五十二氏外二十八名に通牒するに、京橋區山城町の工學會に於て土木學會創立の件に關し協議を遂げんことを以てし、其の參會を求む。當日の出席者は先生の外に、石黒五十二、丹羽鋤彦、岡田竹五郎、小田川全之、大屋權平、沖野忠雄、吉村長策、中山秀三郎、武笠清太郎、日下部辨二郎、増田禮作、古川阪次郎、近藤虎五郎、近藤仙太郎、小柴保人、廣井勇の十六氏にして、第一回協議會を開き、先生より本會設立の趣旨を詳述せられ、一同之に賛成し、大體の方針を議

すると共に、設立趣意書、定款並に規則の草案を起稿せんが爲に、岡田竹五郎、吉村長策、日下辨二郎、古市公威、近藤虎五郎、近藤仙太郎、廣井勇の七氏を特別委員に擧げたり。

本會創立の議茲に決し、特別委員は屢々會合を重ね、各草案の作成を了したるを以て、五月創立有志者會合して、規則書及び趣意書、其の他の案件を議了し、六月一日全國の土木工學専門家六百餘名に向ひ、本會設立趣意書を發送し、創立發起人たらんことを勧誘せり。其の趣意書左の如し。

土木學會設立趣意書

泰西諸國の工學界を觀るに各専門家は競ふて斯學の研鑽に従事し孜孜として倦まず各自研究實驗の成績を發表討議するの機關としては則ち學會を興し刊行物を頒布し恒に斯學の進歩發展を怠らざるを期す斯學現時の隆盛を致せる蓋し偶然にあらざるなり而して我國に於ても現に機械電氣、建築等の如き既に各専門の學會を設立し研鑽を怠らざるは我工學界の爲め賀す可きなり然るに吾人専攻の土木學科に至りては學界其人に乏しからず事業亦尠少なからざるに拘はらず今日に至るまで未だ土木學會の設立を見るを得ざりしは誠に遺憾の極にして亦工學界の一大缺點ならずとせず仍て吾人茲に土木學會を設立し會誌を刊行し研究討議の途を開き汎く意見を交換し以て土木學の進歩及土木事業の發達に資せん事を期す

此勧誘に對して直ちに發起人たることを承認せるもの三百八十餘名に及べり。是に於て大正三

年九月發起人總會を開き、古市先生座長と爲り、定款及び規則案を議事に附したるに、原案の如く可決確定し、次に役員選舉を行ひ、古市先生は會長に、沖野忠雄、野村龍太郎兩氏は副會長に、石黒五十二、中山秀三郎、日下部辨二郎、古川阪次郎、近藤虎五郎、白石直治、廣井勇、仙石貢の八氏は常議員に當選せられ、定款に従ひ本會の理事三名は會長及び副會長之に當ることとなれり。尋で九月の役員會に於て、名井九介、生野團六の二氏を主事に、柴田畦作、岡野昇、吉村惠吉、直木倫太郎、宮川清の五氏を編纂委員に推薦し、柴田畦作氏編纂委員長と爲り、陣容茲に整へるを以て、社團法人士木學會設立許可を文部大臣に出願し、十一月其の許可を得、十二月法人設立登記を了して、本會の成立を見たり、當時會員は三百八十餘名なりき。

一方古市沖野兩博士の還暦を機とし、多年我國土木工學界に盡瘁せられたる兩博士の功績を永久に記念せんが爲に、同志胥謀りて資金を募集したる結果、大正四年二月に至り寄附金總額壹萬五千八百五拾七圓に達し、募集に要せる諸雜費を控除して、殘額金壹萬五千五百五拾圓を得たるに依り、同年三月委員は之が使途に關して兩博士の指示を請ひたるに、土木工學獎勵の趣旨に基き、其の全額を土木學會基金に寄附すべしとの回答に接したるを以て、委員は直ちに寄附手續を了し、賛同者千四百四十人に對して此旨を報告せり。

抑も土木工學は、國家社會の發展、人類の福利増進に寄與すべき工學の一大分科にして、其の專攻する所は、治水、港灣、鐵道、道路、橋梁、上下水道、水力發電、都市計畫、砂防、灌溉、排水等、國民の利用厚生、一國の資源開發、並に文化の向上に極めて重要な關係を有するを以て、本會設立以來古市會長は幹部を督勵し、全會員と協力し、其の目的達成に向つて最善を盡され、機關雜誌を發行し、講演會を開催し、會員各自の獨創的研究調査を始め、實施工事の成績を發表して討議せしめ、又見學旅行を催して、斯學に關する智識の啓發に資するの外、本會に於ては、各種の調査事項を討究し、或は廣く各方面の諮問に應じ、以て學會としての任務に當れる等、一に古市會長の指導に俟ち、着々其の歩を進めたりしが、定款第十一條に於て會長の任期は一箇年とし重任することを得ずとの規定に依り、先生の任期は大正四年末を以て滿了し、大正五年一月沖野忠雄博士其の後任として會長に當選し、爾來土木界の長老は毎年交替して會長に就任せられたり。然れども先生の本會に對する熱誠は、會長たると否とを問はず、退任後と雖前會長として常に役員會に臨みて指導の勞を惜まず、本會の發展を期せられたるを以て、初め會員三百八十餘名なりしもの、創立二十周年記念祝賀會を舉行せる昭和九年十二月に於ては四千三百餘名の多きに達し、本會各種の事業も亦良好なる成績を擧げ、本會の社會的活躍は益々其の大を加ふるに至れり。

土木學會々長は、其の在職中一回會長講演を爲すの規定ありて、此演說こそ我土木事業及び技術研究に對し、一般的指針を與ふる代表的重要な講演として、會員一同の每會期待注意する所な

り。従つて會長には常に本邦土木界の長老にして名聲赫々たる先輩を推舉し、一年を以て交迭するの規定となし、會長は退職に際し、毎年一月の總會を機として其の所感を發表するの慣例なり。然るに先生は創立當初會長に就任せられ、在任中二回の總會を開きしを以て、重ねて會長講演を爲し、會員に多大の満足を與へられたり。今其の講演の概要を掲ぐれば左の如し。

大正四年一月の會長講演は、土木學會の方針に就てと題せられたるものにして、先づ明治十二年工學會設立當時の學界狀況より説き起し、爾來各學會の順次創設せられたる所以を述べ、斯かる専門分業の趨勢は、更に益々其の歩を進めつゝありとて、數年前工科大学に鐵冶金學專修科を置きたるに、之に對して近日日本鐵鋼協會の創立せられんとするは、其の一證なりと説かれたる後、語を轉じて、余が佛國に於て學べる「エコール・サントラル」の方針は、工學の各専門を網羅し、總括的智識を有せしむるに在りて、今日と雖同一制度を施行しつゝあり、敢て之を模範とするに非ざるも、今余の言はんと欲する所は、専門分業の方法及び程度は、場合に依り大いに取捨せざるべからざることは是れなり、即ち極端なる専門分業に束縛せられて、叢爾なる限界に齷齪するが如きは、余の採らざる所なり。抑も本會の會員は、技師にして技手に非ず、又將校にして兵卒に非ず、皆斯道の指揮者なり、若し夫れ指揮者を指揮する人、所謂將に將たる人を要する場合は、土木に於て最も多しとす、故に土木技師は常に他の専門の技師をも指揮する能力を有せざるべからず、是を

以て本會の研究事項は、單に土木に限らず、工學全般に擴むるを要す、唯本會の工學會と異なる所は、工學會の研究は各學科間に輕重なしと雖、本會の研究は専ら土木を中心として八方に發展するに在り、之れ余が本會の爲に主張する所の専門分業の方法及び程度なるものにして、工學の範圍以外、更に工藝經濟學、土木行政法、工業衛生學等、研究を要するもの尙他に幾許あるを知らず、希くは土木を中心として研究の範圍を縱横に擴張せられんことを望む。

次に大正五年一月總會の會長講演に於て、戦争と技術者との關係を説かれて曰く、今回の歐洲大戰に於ては、經濟工業の動員、並に知識の動員を行ひ、國家全體を軍隊的に組織し、其の全力を戦争なる一事に傾注するを要するに至れり。既に開戦後十五ヶ月半の間に、滿二十歳以上三十五歳以下の壯丁の損害は、其の全數に比すれば英の一割二分、佛の三割、白の六割、獨の七割五分、澳の八割、露の三割、伊の七分、塞の六割五分にして、之れが補充の爲には、少年と云はず老人と云はず、苟も身體の健全なる者は皆戰場に送らるるに至るべし。且義勇兵の多數に活動するは、歐洲の戦争に於て從來屢々見る所なるも、今回は一層其の數を増加したるは言を俟たず。佛國の土木技師は皆工兵の豫備士官にして、平時は工務省に屬し、一朝事ある時は動員令の發せらるると共に陸軍長官の命令の下に服務し、又鑛山技師は砲兵の豫備士官たらしむ。今回の戦亂に於ては、常設の豫備士官以外に臨時士官を採用し、余の會て學びたる「エコール・サントラル」の卒業生及び在學生に短

期間の軍事教育を授けて出征せしめ、多くは砲兵士官として活動し、既に勳功の旌表せられたる者尠からず。佛國の七十五ミリの野砲は有名なる良器なるが、此等技術者たる士官の使用に依りて、一層其の効力を發揮したるもの如し。又戦争と鐵道とは最も重要な關係を有するは勿論なるが、獨逸が破竹の勢を以て白耳義を侵略し、其の西南隅に向つて壓迫し來り、獨帝は如何なる犠牲を拂ふも「カレー」を奪取せよと命じたる時、佛軍は之をして其の目的を達せしめざりしは、實に鐵道の功績にして、六十五キロメートルより四百キロメートルの區間に於て、大小六千列車を運轉し、七十個師團を迅速に戰場に輸送したる結果と謂ふべく、技術者の力に俟つ所最も多し、以上は主として直接戦闘に従事する技術者の活動なるも、更に後方に屬する部面を顧れば、技術者を用ふべき範圍頗る廣く、所謂工業動員を行ふに方つては、殆んど技術者の助力を要せざるものなし。故に非常時局に際しては、技術者は直接戦闘に参加するか、或は軍事上必要なる他の職務に従事するか、二者其の一に當るの覺悟なかるべからず、吾人は豫め此場合に處するの途を講ずるの緊要なるを認む。余は曾て工科大學に於て、多少の軍事教育を授け、卒業の後技師たる者をして豫備士官たるの素養を得せしめんとし、之れが授業科目をも決定し、以て陸軍の意向を探りたるに、軍人は根本的軍人たらざるべからずとの意見にして、實行の見込なきを以て、遂に斷念するに至れり。其の後日清日露の二大戦役ありしも、非軍人の直接戦闘に参加するの必要甚だ尠かりしが故に、別に

問題なくして経過したるが、今後は歐洲大戰に鑑みて大に事情を異にすべく、所謂根本的軍人のみならず、國家の全力を擧げて戦はざるべからざるを以て、國力の利用方法に就きて研究を要すると共に、技術者の動員計畫を定むるは目下の急務たるを確信す。之れが爲には陸海軍參謀を中心とし、各方面に互り有識者を集めて委員を組織し、精細に研究決定すべきものなりとて、其の所信を披瀝せられたり。

越えて昭和八年一月、先生八十歳の高齡に達し、特に宮中杖を許させられたると、幸子夫人との結婚後五十年所謂金婚の嘉辰に當り慶事相踵ぐを以て、本會は此機會に於て、先生の功績に對し感謝の意を表せんが爲、役員會に於て先生を本會第一回の名譽會員に推薦するに決し、同年一月定時總會の席上、中山秀三郎博士より推薦趣旨を述べられたり。其の要旨に曰く、先生は最初の工科大學々長として、今日の工學部の基礎を確立し、又工手學校管理長、工學會々長として盡力せられ、萬國工業會議及び世界動力會議に於て、非常なる成功を收めらる。且其の専門たる土木方面に於て之を見るに、明治初年以來外人の手に委したる土木事業の計畫を總て邦人の手に移し、當時河川の治水、港灣の修築、多く先生の手に成り、更に土木行政に一新時期を劃し、土木事業の進歩發達を計り、鐵道方面に於ては京釜鐵道の速成を完了せらるる等、我が國の工學界及び土木界の元老として又大恩人として、其の功績枚擧するに遑あらず。殊に土木學會の創立者たり、第一回の會長たり、

其の創立當時に於て、巨額の還暦記念贖金全部を寄附せられ、本會今日の發展の基を爲せり。本年八十歳の高齡に達せられ、數日前宮中杖を許さるるの榮に浴せられ、且又本年は結婚滿五十年の金婚を迎へらる、此の機會に於て本會は先生の功績に對し、深く謝意を表せんとするに當り、昨年十一月定款一部の改正を行ひ、名譽會員を設けられたるを以て、役員會は先生を最初の名譽會員に推薦せんとするの議を決し、本日の定時總會に提出したる所以なり、希くは全會一致を以て推舉せられんことを望むと。議長名井九介博士之を議場に諮りたるに、全會一致を以て可決し、拍手盛に起れり。

先生は實に本會の創設者として、又第一回會長として、本會の基礎を確立せられ、本會をして今日の隆盛を來し、國家社會に貢獻する所多大なるものあらしめられたるの功績は、全會員の齊しく景仰する所、録して以て永遠に傳ふべきなり。

第二節 協 會

一、日佛協會と日佛會館

明治十九年九月、古市先生等の首唱に依りて設立せられたる佛學會は、東京佛學校を創設し、又

佛文會を併合して、同會の學生を佛學校に收容し、更に佛學校と東京法學院とを合體して和佛法律學校と改稱したるもの、即ち現今法政大學の前身なることは、前章學校教育の條に於て之を述べしが、明治四十二年四月、佛學會は日佛協會と改稱し、從來の學校經營を離れて、専ら日佛親善を目的とする社交團體と爲れり。同協會は、閑院宮殿下を總裁に仰ぎ奉り、理事を選任して會務を整理せしめ、總裁宮殿下は理事中より辻新次男を理事長に、古市先生を副理事長に委嘱せらる。而して先生は其の流暢なる佛語を以て佛人との交際場裡に活躍せられ、日佛親善に貢獻する所頗る多く、大正三年辻新次男に代つて理事長に選任せられたるの後は、其の任益々重さを加へ、身を挺して兩國の爲に盡瘁せられ、其の功績顯著なるものあるを以て、大正五年三月、佛國政府は「レヂョン・ド・ネウル」三等勳章を贈與して、先生の功勞を表彰せり。

大正八年七月、世界大戰の勝敗と終局との尙未だ容易に逆睹すべからざるの時、「リヨン」大學總長「シユバン」氏、及び同教授「クーラン」氏は、佛國大學使節として相携へて我國に來朝し、日佛文化關係の實狀調査を遂げ、日佛文化の協同を提案したるを以て、日佛協會理事長たる先生は滿腔の賛意を表し、澁澤榮一子、富井政章男、山川健次郎男も亦賛成せられ、其の他朝野の名士と共に、其の實現の一日も速ならんことを翹望せられ、前記澁澤子爵富井男爵等に加ふるに、犬養毅氏及び杉山直治郎博士を以てし、日佛文化協同の實行案を講究せらるるに至れり。次で大正十年三月、杉

山博士の提案に依り、先生は日佛協會の名を以て、日佛朝野の名士を會合し、其の賛同を得て實行委員會を組織し、協同實施に關する具體的講究を進められしが、此計畫は日佛有力者の熱心なる賛成と後援とを得たると、且は政府より補助金下附の内命ありたるとに依り、實行委員會は我國有志より約八萬圓の贖金を求め、大正十二年三月、日佛文化協同機關たる日佛會館を設立し、當初より此設立に盡力せられたる澁澤子爵を同會館理事長に、古市先生と富井男を副理事長に推薦せり。

日佛會館の創立せらるゝや、佛國政府は自國學界の碩學を館長として特派し、又新進學者及び學徒を同館の宿泊生として派遣し、日本文化を研究せしむると共に、兩國の學的親交に努力せしめ、我國に於ても佛國關係者は、長老たると新人たるとを問はず、多く日佛會館に入會し、會館を中心として相往來し、互に親睦を重ね、知識を交換し、更に會館は隨時學術講演會を開き、學者の親睦會を催し、常に日佛協會と提携して、兩國名士の送迎、及び兩國親善に關する諸般の事業に協力せり。而して又日佛會館に起居せる佛人は「日佛學報」を發行して、日本文化の研究を祖國に紹介し、邦人側に在りては「日佛文化」を刊行して、佛國文化に關する研究を發表し、日佛文化協同事業は、茲に著しく其の實績を擧ぐるに至れり。是れ實に古市先生の盡瘁に待つ所多きものあるを以て、大正十五年五月佛國政府は、更に先生の功勞に酬いんが爲に、「レヂョン・ド・ネウル」二等勳章を贈呈せり。

昭和二年四月、先生は日佛協會理事長を辭任し、同會名譽副總裁に推薦せられたるも、日佛會館の副理事長としては留任せらる。昭和四年同會館理事杉山直治郎博士が「佛蘭西科學」(La Science Française)を邦譯出版せられたるの際、先生は本書の序文に於て、由來佛國は自國文化の宣傳に努めざる傾向あるを以て、佛國自然科學の價值は、我國に於て認めらるゝこと比較的少しと雖、何ぞ知らん自然科學の發達は佛國を嚆矢とし、今日に於ける歐洲の科學進歩は、實に佛國に負ふ所多きものあるを知らざるべからずとて、大いに我學界の注意を喚起せられたり。

昭和六年十一月、日佛會館理事長澁澤子爵薨去し、翌七年七月先生其の後任として理事長に選任せられ、爾來同九年一月の薨去に至る迄在任せらる。抑も歐洲大戰以後に於ける日佛文化協同の美果を結べるは、先生を始めとし、澁澤子爵、富井男爵の三位一體の力に依ると稱せられ、日佛提携の今日あるに至れるもの、實に此の三者の功績に待ちたるは敢て多言を要せずと雖、更に大戰以前に溯り、明治十九年先生が佛學會を創立し、後之を日佛協會と改稱し、日佛親善を目的とする社交團體を成立せられし以來の事歴を顧みるの時、先生を第一人者として其の勳績を擧げずんば、日佛文化協同の發展を語るを得ざるなり。

二、港 灣 協 會

歐洲大戰を一轉機として、世界各國は文化的施設の擴充に銳意其の力を致し、國力の振興を圖るに維れ日も足らざるの狀あり。此時に當り我帝國の地歩を確立し、世界の大勢に順應せんが爲には、先づ産業の發展を期せざるべからざるを以て、産業の發展に重大の關係を有する交通機關の整備、就中港灣問題の如きは、寔に焦眉の急務たるを感ぜずんばならず。

由來我國の港灣は、徳川幕府三百年の久しき鎖國政策を執り、大船巨舶の建造を禁止したる餘弊を承け、其の發達今尙頗る遅々たるものあり。港灣制度未だ確立せず、修築事業亦振はず、水陸聯絡の設備完からずして、鐵道及び船舶の如き交通機關の發達に比し、著しく遜色あるを免れず。是を以て近時我政府は、港灣に就きて企畫する所あるもの如しと雖、今や施設の擴充を要するの時に際し、單に當局の爲す所にのみ倚賴して已むべきにあらざるを以て、同志胥謀り全國の有力者を糾合し、相共に港灣政策の研究調査を遂げ、或は當局に進言し或は公論に訴へ、講演會、講習會又は展覽會を開催するの外、會報其他圖書を頒布して、港灣に關する國民の知識を向上し、又直接港灣に利害の關係を有する者の奮起を促し、港灣の修築及び海陸聯絡設備の完成を期し、政府の事業

と策應して、港灣改善の實を舉げ、以て時運の進展に資する所あらんが爲、大正十一年十一月港灣協會の設立を見るに至り、會長には時の内務大臣水野鍊太郎氏、副會長には古市先生と内務次官堀田貢氏を推し、理事、監事、評議員若干名を推薦し、爾來港灣設備の完成に向つて、着々其の歩を進めたりしが、其の後本會の責務一段の重荷を加ふるに至れるを以て、大正十四年六月、副會長を五名とし、新に内務次官、大藏次官、逓信次官を加へ、昭和二年十月本會の組織を變更して社團法人と爲し、其の基礎を一層強固確實ならしめたり。

抑も本會創立の由來を釋ぬるに、初め大正十一年春夏の交、南滿洲鐵道會社大連埠頭事務所庶務課長市川數造氏が、同會社の經營に係る大連港に關し、同港と密接の關係を有する日本の港灣當局者との間に、港灣行政座談會を催し、船舶の出入、貨物の取引、其の他に圓滿なる交渉を行ひ相互の便宜を圖るべく、案を埠頭事務所會議に提出せり。時に梅野實氏埠頭事務所長たり、先づ此案の必要を認め、大阪市港灣部長直木倫太郎氏の意見を求む、直木氏之を良案なりとし、更に内務省土木局港灣課長松本學氏に諮る。是より先、松本氏も港灣關係者の團體成立に努力せんとの意ありしを以て、今此案あるを好機とし、港灣關係者を翕合せる港灣協會と稱する如きものを設立し、官民協力して種々意見を交換せば港灣發展上便宜なりとし、松本氏は此旨を以て直木氏に答ふ。蓋し此答案は當初の方針を一層完全にし、且擴大するものなるを以て、南滿洲鐵道會社當局に於ても之

に賛成し、内務省の協力に依り、廣く各府縣港灣關係者を招待することとなり、大正十一年十月招待會を大連海務協會に開催せしに、其の席上港灣協會設立の動議あり、滿場一致の賛成を以て直ちに同會創立協議會を開き、港灣關係の各官廳を始め、海運、貿易、倉庫等民間當業者中より、官民多數の名士を創立發起人とし、實行委員二十六人を指名し、同年十一月港灣協會は成立を告げたり。

本會の目的は既に述べたるが如く、産業貿易の振興を圖らんが爲に、港灣政策の研究調査を遂げ政府の事業と策應して、港灣改善の實を擧げんとするにありて、其の機構は執行機關(理事會)、決議機關(常議員會、評議員會、總會)、及び調査機關の三とす。而して通常總會は毎年一回之を開き、重要な事項を決議するものにして、第一回通常總會は大正十三年四月神戸市に於て開き、爾來年々主催地を變更して開會し、今日に至れり。而して第三回通常總會當時は、水野會長海外旅行中なりしを以て、古市副會長は七十有餘歳の老軀を提げ、盛夏三伏の暑熱を厭はず、小樽市の總會に臨みて議事を統べられたるは、會員の齊しく感謝して措かざる所なりき。

又本會の調査事項としては、港灣法の制定、港灣行政の統一、重要港灣の選定、地方港灣の補助費、港灣荷役の改善、自由港の設置、關東大震災火災と東京横濱兩港の復興、日滿連絡と北鮮港灣の選定、關門兩港の統一管理、帝國內各地方の港灣に關する諸問題等を研究調査し、或は之を當局に建議し、或は輿論の喚起を促し、又地方公共團體の依頼に應じて適切なる修築計畫を指示し、地方港

灣の改良發達を助け、博覽會展覽會等に幾多の資料を出品して、大いに港灣知識の普及宣傳に努め、更に講習會を開き、毎月機關雜誌を發行して、當事者を指導し來れり。此間古市先生は、斯道の元老大家として一般の信頼を集められたる身を以て、甘んじて副會長の任に當り、本會創設以來終始一貫其の偉大なる聲望を以て克く水野會長を補佐せられ、重要問題に對しては各方面に於ける多年の經驗と蘊蓄を傾け、常に大局に處して指導を謬らず、以て本會の目的達成に勉められたるは、一に本邦港灣の改善發達を助長し、國家に貢獻せられんとする先生の誠意に外ならざるなり。而して是れ獨り本會のみならず、一般港灣關係者が共に其の功勞に對して感謝せざるべからざる所以なりとす。

三、日本動力協會

動力の資源、發生、分配、利用に關する諸問題は、世界各國産業興隆の根本問題たること言ふを俟たず。本問題を提げて最初に國際會議を開催したるは、英國電氣機械器具製造業者協會理事「ダニロフ」氏の主唱にして、嘗て陸軍大臣たりし「ロード・ダービー」卿を總裁とし、大正十三年六月、英京倫敦に世界動力會議と銘打つて、英國皇太子殿下の台臨を仰ぎ、四十七ヶ國より斯界の權

威者八百餘名の参加と、提出論文四百三十篇とを得て成功を収め、之を第一回として、恒久國際機關とすることに決定せり。

此會議には我國より工學博士加茂正雄氏を主席として、七名の代表者参加したるが、同氏等は正十四年二月歸朝するや、古市日本工學會長に右の世界動力會議の状況を縷述し、我國に於ける國內的及び國際的調査機關の設立に就きて先生に諮る所あり、先生乃ち加茂博士等と協力し、大正十五年十二月、動力の發生、分配、利用に關し、學術、經濟及び行政各方面の官民有力者を網羅し、權威ある委員會を組織する目的を以て勸誘の結果、昭和二年七月、世界動力會議日本國內委員會を組織し、同時に日本動力協會の設立を見るに至れり。而して古市先生を協理專長に、加茂博士を委員會長に推し、更に世界動力會議東京部會開催の計畫案を樹て、十一月先づ日本動力會議を東京に開き、動力資源、電力統制、動力發生機、及び輸送用動力の四問題に就きて、國內的討議を行ふと共に、東京部會々議開催に關する調査委員會を設置し、該委員會は更に特別委員を設けて、諸種の事項を調査せしめたり。

昭和三年八月、日本動力協會の組織を社團法人に改むると共に、古市理事長は會長に就任し、同年九月、日本國內委員會長加茂正雄博士は歐米諸國を巡歴して、明年開催の東京部會に参加を勸誘し、十月國內委員會は東京部會規則に關し、本會議の組織、權限、事務の執行、會議の遂行に關する

要項を決定し、古市先生を會長に推薦せり。尋で本會議總裁として 秩父宮殿下を奉戴し、昭和四年九月華族會館に於て奉戴式を舉行し、古市會長の御禮言上に次ぎて、總裁宮殿下は優渥なる令旨を賜ひ、外交團代表英國大使「ジョン・テイラー」卿、及び名譽會長小泉遞信大臣の挨拶ありたり。

抑も此東京部會は、萬國工業會議を絶好の機會として、同時に東京に於て開催するの計畫に出でたるものなるを以て、内外國參加會員は兩者共通の關係を有し、本部會に提出の論文は、動力の資源、發生、利用、分配等に關する特殊の事項に限られたるにも拘はらず、其の數は邦人四十六篇、外人七十八篇、合計百二十四篇に及べり。乃ち之を左の四部會十六部門に分ち、各部門毎に内外國人より議長副議長を選定せり。

一、動力資源の開發

石炭及び其の處理。石油。諸般の動力資源開發と利用法。液體燃料問題。

二、電力統制

電力統制及び管理。水力問題。火力發電及び水火併用(電氣事業管理)。送電及び配電。管理及び行政。

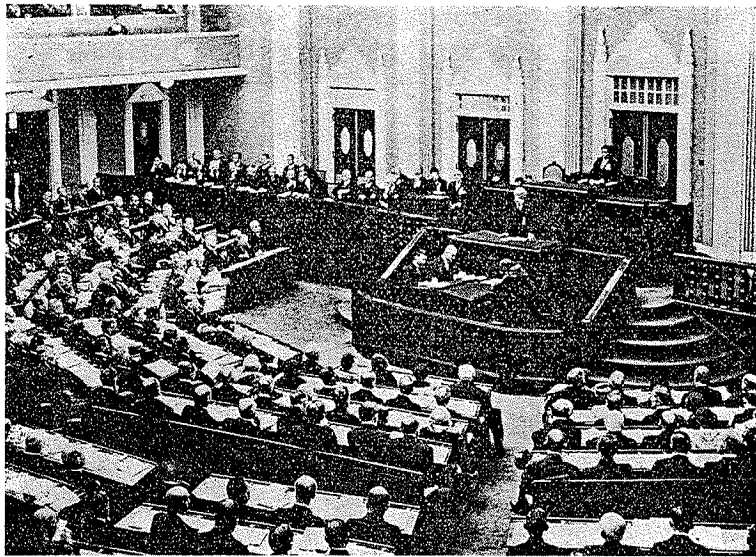
三、輸送用動力

鐵道運輸問題。發動機車(自動車)。船舶推進法問題。

四、動力發生及び貯藏

動力發生一般。蒸氣發生及び其の貯藏。原動機(蒸汽タービン)。ディゼル、エンヂン。

昭和四年十月二十九日、帝國議會議事堂衆議院議場に於て開會式を行ふ、三十箇國よりの外人五百三十餘人と共に參會者一千四百餘名に達し、先づ總裁宮殿下は令旨を賜ひ、今回我國に於て萬國工業會議開催せらるるに際し、世界動力會議東京部會を開き、内外多數の權威者を集め、其の研究を發表し、意見の交換を行ふは、眞に機宜を得たるものと信ず、必ずや世界の文化に對し貢獻する所尠少なからざるべし、殊に遠く海外より參加せられたる諸君に對し、本會議の



衆議院議場に於ける世界動力會議開會式
(議長は席長 秩父宮殿下・壇上に古市市長)

目的達成の爲に拂はれたる熱誠なる努力を感謝すると共に、此機會に於て親しく我民情に接し、深く國情を理解し以て國際親善に資する所あらんことを切望せらる。次に小泉名譽會長の式辭、及び會長古市先生の挨拶あり、先生は本會議開催の由來、參加會員及び提出論文に對しての感謝、並に本會議に於ける議題の主要點を述べ、會議の結果が世界人類の爲に大なる貢獻を齎されんことを望み、且此機會に於て遠來の外客諸君は、日本國民の眞髓に觸れ、國際親善の關係を一層深からしめられんことを希ふと結ばれたり。次に海外出席者代表として、英國の「フランク・ギル」氏、米國の「オー・シー・メッレル」氏、獨逸の「オスカール・フォン・ミラー」氏、支那の胡博淵氏の演説ありて式を畢れり。

四部會十六部門の論文に就きての討論は、十月三十日より十一月六日に至り討論者百五十一人の多さに上りて、熱心且圓滑に行はれ、此の間總裁宮殿下の御傍聽を辱うし、非常なる好成績を收むるを得たり。而して接待及び見學に關しては萬國工業會議と共通なるを以て、本部會に於ては、十月二十九日紅葉館の晩餐會に、外國より參加せる動力會議國際執行委員二十餘名を招待したると、翌三十日古市會長主催の午餐會、十一月七日委員長加茂正雄氏の午餐會ありたるのみなりき。此午餐會の後、華族會館に本會議の總會を開き、加茂委員長議長と爲りて、各部會に於ける議事經過を報告し、次に電力統制問題に關し、統計的數字の統一、各國共通の特定様式等に就き、特別委員

を設けて審議せしめんことを諮り、審議の結果を明年伯林の第二回萬國動力大會に提出するに決し、之を以て總會を終れり。

總會終了の後、古市會長は閉會式を行ひ、先づ廣島御出張中の總裁宮殿下より電報を以て拜受したる令旨を披露し、次に古市會長の閉會の辭あり、各部會に於て熱心に討議せられたる論文は、近く之を印刷に附して發表し、文化の進展、人類の福祉に資せんことを期する旨を述べ、海外參加諸君が本會議の開催並に成功の爲に盡力せられたるを感謝し、且見學旅行に於て能く我國情を視察し、以て國際親善を厚からしめられんことを望み、次に英・米・露・白・加奈陀・和蘭・瑞西・支那代表の挨拶ありて大成功の裡に閉會せり。

昭和四年十二月、世界動力會議日本國內委員會は、古市先生を其の會長に推薦し、倫敦に於ける同會議中央事務局に向つて、古市會長が我國際代表者たる事を通告せり。又昭和六年三月、世界動力會議は、大正十四年「グルノーブル」會議に於ける佛國の提唱に基き、世界動力會議の一分科として、世界動力會議大堰堤國際委員會を設置し、大堰堤の設計、建造、維持等に關する國際的調査研究に當ることとなりたるを以て、我國も亦日本動力協會、電氣協會、及び土木學會より、各委員を選出して、日本國內委員會を組織し、古市先生を其の委員長に推舉し、同時に又其の國際代表たることを聲明せり。此大堰堤に關する國內委員會は、先生の熱心なる指導に依り、世界大堰堤國際委員

會の最も有力なる一員として各國の認むる處となり、日本委員會に對し、屢々重要なる提言を爲すに至れり。

初め先生の盡力に依り成立せし日本動力協會に對し、先生は理事長として就任せられ、更に社団法人に改めたる後は會長となり、薨去に至るまで其の任に當られ、終始熱誠畫策せらるる所あり、又役員會に於ても率先して會務に關する重要問題を提案せらるるを常としたり。昭和九年一月二十八日、先生薨去に際し、世界動力會議中央事務局は先生の功勞に對し景慕止まず、深甚なる弔意を表して打電し來れり。

四、帝國鐵道協會

日清戰役後、諸般の企業勃興し、殊に鐵道事業に在りては、官私兩方面共に著しき發展を來し、既設鐵道の擴張、新設鐵道の企業相踵いで起り、將に鐵道全盛の機運を出現せんとする秋に當り、鐵道に關する經濟的及び技術的の研究調査を進むると同時に、企業者間に於ける社交的關係の連絡を密接ならしめ、斯道の改良發達に資するの必要ありとし、渡邊洪基、松本莊一郎、仙石貢、平井晴二郎、毛利重輔、其の他の諸氏相謀り、明治三十一年十一月帝國鐵道協會を創立し、會長には陸軍大將川上操六氏を推薦し、副會長には渡邊洪基、松本莊一郎の兩氏を選任したるが、同時に會員たる

古市先生は評議員に選舉せられたり。

明治三十六年三月副會長松本莊一郎氏薨去の直後、先生は理事に選舉せられ、次で副會長に互選せられ、其の後明治三十九年及び大正六年にも、亦副會長に選任せられ、理事としては大正十年に至る迄前後十有七年間在任し、絡始一貫、本會の伸展及び鐵道事業の進歩改善に努力せられ、斯界の長老として一般に重んぜられたり。其の間本會の事業として調査實行せし社團法人の組成、松本文庫の設立、本會々館の新築等を始め、鐵道諸規程の修正、鐵道連絡輸送、鐵道軌道の行政手續、工事請負方法の改善、鐵道電化、鐵道用品統一等の諸問題、並に東京市内外、大阪市内外、及び東京横濱附近等の交通網の調査計畫、其の他本會單獨の調査事項、及び土木學會との聯合調査等に對し、其の研究審議に當り、常に指導助力を與へられたり。尋で大正十三年五月、先生は鐵道事業及び本會に對し顯著なる功績あるの故を以て、評議員會の決議に依り本會名譽會員に推薦せられ、薨去後の今日と雖、鐵道界一般の敬慕する所となれり。

第三節 學術研究會

一、學術研究會議

大正七年十月、歐洲大戰の酣なる時に當り、英國に於ける皇立協會主催の下に、聯合諸國學士院代表者の會議を開き、科學的萬國協會の組織に關して協議する所あらんとし、此旨を我政府に照會し來れるを以て、政府は之を帝國學士院に諮りたるに、同院は代表者を派遣するに決し、會員櫻井錠二、田中館愛橘兩博士を選びて之に參列せしめたるが、會議の結果は萬國學術研究會議を組織し、國際間の學術的聯絡統一を圖ることとなり、同年十一月更に巴里に於て、同會議委員會を開かれたるを以て、又兩氏をして之に出席せしめたり。尋で翌大正八年七月「ブルツセル」に於て、萬國學術研究會議第一回總會を開くに當り、帝國學士院は代表として歐洲滞在中の會員田中館愛橘博士を參列せしめたり。

帝國學士院は倫敦決議の極めて重要なるを認め、院長穗積陳重男は本邦に於ける學術研究會議の設立に關し、原内閣總理大臣並に中橋文部大臣に建議書を提出したるが、政府は其の必要を認め、第四十三回帝國議會の協賛を経て、大正九年八月勅令第二百九十七號を以て、學術研究會議官制を公布し、學術研究會議は科學及び其の應用に關し、内外に於ける研究の聯絡並に統一を圖り、之れが研究を促進獎勵するを以て目的とすと規定し、學界の權威者を網羅し、此の目的に向つて邁進することとなり、同年十一月、工學博士男爵古市公威、工學博士高松豊吉、理學博士櫻井錠二、理學博士田中館愛橘、醫學博士小金井良精、醫學博士佐藤三吉の諸氏を始め、會員九十四名の任命を

見たり。同年十二月穗積帝國學士院長は座長となり、學術研究會議第一回總會を文部省内に開き、會長及び副會長の選舉を行ひたるに、會長に古市先生、副會長に櫻井錠二博士當選したるを以て、穗積院長は即時文部大臣の認可を受け、古市會長に事務引繼の手續を了し、學術研究會は爰に其の設立を完成し、當日より獨立して會務を行ふこととなれり。

是に於て古市會長は、同十二月學術研究會議の部門を、(一)天文學部、(二)地球物理學部、(三)化學部、(四)物理學部、(五)地質學地理學部(六)生物學農學部、(七)醫學部、(八)工學部の八部とすることを議定し、各部長及び副部長の選舉を行ひたるに、(一)部長理學博士平山信、副部長理學博士新城新藏、(二)部長理學博士田中館愛橘、副部長理學博士中村精男、(三)部長工學博士高松豐吉、副部長理學博士池田菊苗、(四)部長理學博士長岡半太郎、副部長理學博士水野敏之丞、(五)部長理學博士小藤文次郎、副部長理學博士山崎直方、(六)部長理學博士飯島魁、副部長農學博士安藤廣大郎、(七)部長醫學博士佐藤三吉、副部長醫學博士森島庫太、(八)部長工學博士井口在屋、副部長工學博士男爵斯波忠三郎の諸氏當選就任し、古市會長は殘餘の會員七十餘名の部屬を定め、別に古市會長、櫻井副會長及び理學博士藤澤利喜太郎氏を以て總務部を組織し、本會の發展に向つて著々其の歩を進められたり。

大正十年一月、學術研究御獎勵の思召を以て、長くも皇室より金壹萬圓を下賜あらせられ、古市會長以下皆天恩の優渥なるに感泣す。二月本會議會則十六ヶ條を設け、其の部屬員の定數、會員の推薦、會長副會長及び部長副部長の選舉並に任期、定期總會及び部會の開會、總務部及び總務委員の任務、學術部委員會の設置等を規定し、特に天文學及び地球物理學に關する「ナショナル・コンミッティー」を置き、其の天文學には理學博士平山信氏外十人、地球物理學には理學博士田中館愛橘氏外十八人の委員を任命したり。而して同年三月生物學農學部々長理學博士飯島魁氏の逝去に依り、理學博士松村任三氏を以て之れが後任に補したり。

大正十一年十一月、學術研究御獎勵の思召に依り、金壹萬圓を皇室より下賜あらせらるること前年の如く、爾來毎年金壹萬圓の御下賜を例とし、以て今日に及べり。

先生會長に就任以來、我國學界の現状に鑑み、學術研究を促進獎勵するの目的達成の一方法として、總會の決議を経て政府に建議せられたるもの十九件の多きに達し、大正十年五月二十七日の提出に係るものは十五件にして、即ち左の如し。

一、研究の聯絡及び統一に關する建議

科學及び其の應用に關し、内外に於ける研究の聯絡統一を圖り、其の研究を獎勵促進するの目的を達せんが爲には、既設の諸種研究機關交互の間に協議を盡し、無益の重複を避け研究能率の増進を期すると共に、又新設研究機關との聯絡統一を圖るを要す。故に政府に於て、新に科學及び其の應用に關する研究所試驗所等を設置せんとす

る場合には、豫め本會議に諮詢せられんことを望む。

二、南洋學術研究所設立に關する建議

南洋に於ける帝國の委任統治地は、赤道地方に散在し、颱風發生の源泉地なるを以て、太陽光熱の變化と颱風發生との關係如何を研究するに絶好の地點を占む、故に政府は此の地域内に學術研究所を設け、天文及び氣象、地理學及び地質學、其の他生物學等に關する研究を遂行せしめられんことを望む。

三、太陽觀測所設立に關する建議

太陽の表面には斷えず變動ありて、その變動が地球に及ぼし、生物の發育人類の生活に影響する所あるを以て、米國の如きは夙に大規模の太陽研究所を興し、且つ萬國太陽研究聯合會を組織し、明治四十三年我が日本の同會に加入せんことを懇願し來れるにも拘はらず、今日に至る迄之に應ずることを得ざるは遺憾に堪へず。殊に日本は經度の關係上、太陽の研究に最も便益ある地位を占む、然るに之に關して未だ何等の設備を有せず、政府は速に適當の地點を選びて、太陽觀測所を設置し、大に此の方面の學術的進歩を圖られんことを望む。

四、染料工業研究機關設立に關する建議

歐洲大戰前に於ける染料工業の獨逸の專占、及び大戰勃發以來、英米佛等の諸國に於ける染料の學術的研究と、其の工業的技術の改良進歩は驚くべきものあり。然るに本邦の染料工業は、學術的研究に於ても未だ進歩せず、平時に在りて年々産業上の損失は巨額に上れり、一朝事あるに際しては之を如何せんとするか。政府は特に日本染料製造株式會社に對して、補助金を支給しつゝあるも、尙ほ染料醫藥等の自給を見るに至らず、宜しく速に染料研究機關を新設し、學術的工業的研究を爲さしめ、平時は勿論、萬一の變に際しても、自給せしめ得られんことを望む。

五、火山、溫泉、地下熱及び其の利用に關する研究機關設置の建議

世界有數の火山國たる本邦には、噴火爆發屢々起り、溫泉亦各地に湧出するも、之れが研究機關の具備せざるが爲に、其の絶大なる動力の應用、其の地下熱利用の方法を講ずる者未だ之れあらず、實に天與の恩惠を顧みざるの甚しきものと云ふべし。政府は速に大規模の研究機關を設置し、以上の不備を償ひ、其の恩惠を全うせられんことを望む。

六、地球物理學研究所設置に關する建議

氣象、地震、測地、火山、海洋物理、地磁氣等を含める地球物理學の研究は、世界有數の地震火山國たる我が國に於ては、最も必要にして且つ適當の位置に在り。然るに僅に震災豫防調査會、測地學委員會等二三の設けあるに過ぎずして、之を統一せる機關あるを見ず、今や本會議が萬國學術研究會議に加入し、相携へて國際的活動を爲さんとするの時、政府は速に地球物理學研究所を新設し、之れが根本的研究を爲さしめられんことを望む。

七、地震地方に臨時觀測所設置に關する建議

大地震前知の問題は、之を其の發生と發生時とに關する二者に分つを便とす。現今地震帯の研究大に進み其の發生地の前知に對して曙光を見るものありと雖、發生時の前知問題に關しては、未だ研究の歩を進むるものあらず、政府は特別なる地震帯地方に臨時地震觀測所を設置し、本邦に獨特なる地球物理學に於ける貢獻を爲すの途を

開かれんことを望む。

八、民族衛生研究機關設置に關する建議

民族に關する學術研究は、之を其の質と數との二種に分つを得べし。即ち其の質に於ては、營養問題、花柳病、結核、癩病等の民族病、アルコール等の環境が民族に及ぼす淘汰逆淘汰の意義の優生學的研究、殊に本邦食糧及び家屋衛生に關する研究等、其の數に於ては人口問題、特に乳兒保護及び産兒制限問題に關する研究等、政府特殊の機關を設けて是等諸問題を研究せしめられんことを望む。

九、國立癩研究所及び治療院設置に關する建議

癩の研究と其の豫防治療に關し、歐米文明諸國に於ては皆大規模の國立研究所あり。我國にも社團法人癩研究會ありと雖、規模甚だ小なり。政府は速に大規模の國立研究所及び治療院を設けて民生の救治に努められんことを望む。

十、結核病研究所設立に關する建議

我國に於ける統計に據れば、結核病の爲に斃るるもの毎年十一萬餘人、その患者數實に八十萬人に及ぶ、總ての疾病中、慘害第一位に在り。學者之れが研究に没頭する者ありと雖、規模小にして機關の不備なるを遺憾とす。政府は速に特殊の研究所を設立し必要なる設備を整へ、之に附屬せしむるに結核療養所を以てせられんことを望む。

十一、地方病研究所設立に關する建議

我國に於ては歐米諸國に見ざる地方病甚だ多し、脚氣の如きは其の一なり。是等地方病に就きて、各科綜合的研究を爲すは目下の急務なるを以て、政府は速に之れが研究所を設立せられんことを望む。

十二、熱帯病研究所設置に關する建議

輓近日本の勢力南方に向つて發展しつゝあるに際し、熱帯の風土を知悉し、發展の障害物たる熱帯病を研究して、之れが豫防治療の方法を攻究するは、最も重要な任務なり、政府は速に適當なる地を選定して、其の研究所を設立せられんことを望む。

十三、實驗治療學研究所設立に關する建議

從來吾人の使用する藥物の大多數は所謂對症藥にして、病原を撲滅せしむる對病原藥なるものは極めて少數なり。此の對病原藥を發見するは、動物をして人類と同一の疾病を發せしめ、之れが病原を驅除し得る物質を検出するにあり。政府は速に實驗治療學研究所を設立し、各種専門家の協同的研究を行はしめられんことを望む。

十四、海洋學調査に必要な移動研究機關としての船舶建造に關する建議

四面環海の我國に於ては、海洋學の研究は最も重要な言を俟たず、而して之れが研究機關として、單に陸上の固定的設備のみを以てしては、到底其の目的を達すること能はず、宜しく歐米諸國に於けるが如く、移動研究機關即ち船舶を建造し、東洋近海及び南北太平洋上諸島嶼の地理、地質、磁氣、氣象、水産生物の分布、其の他苟も海洋に關する學術的研究の機關たらしむべく相當の設備を施し、速に之れが研究を遂げしめ、以て國富の増進に資せられんことを望む。

十五、科學博物館設立に關する建議

科學及び其の應用の振興に於て文獻の必要なると共に、機械、器具、標本、模型、材料、加工法等の實物に就ての調査研究を行ふの設備なかるべからず、諸外國に於ては既に此の設備として科學博物館を有せり、宜しく政府は速に此の設備を爲し、以て實驗研究を容易ならしめんことを望む。

大正十一年六月三十日の提出に係る建議二件左の如し。

一、學術探險獎勵に關する建議

歐米諸國が夙に南北兩極を始め、亞細亞、亞弗利加、南亞米利加等の奥地に大規模の探險隊を送り、是等地域の調査研究を怠らざるに、本邦に於ては未だ多く此の種の探險を行はざるは、學術の研究及び工業原料の調査上最も遺憾とする所にして、殊に本邦と相距ること遠からざる各地を廣く探險して、比較研究を遂ぐるは目下の急務に屬す。政府は深く茲に考慮せられ、速に學術探險を獎勵し、以て如上の目的を達成せられんことを望む。

二、大正十年度建議したる事項の實行促進に關する建議

大正十年五月建議したる十五件は、何れも國家の基礎を鞏固にし、文化の發展を促進するものなるも、未だ其の實現を見るに至らざるは、政府が之れが必要を認めざるにあらずして、經費支出の困難なるに基因するものと思考せらる。今や我國は列強と軍備の縮少を協定し、國家の財政に幾分の餘裕を生ぜんとす、政府は此際に於て國家發展の根源たる學術研究の資に供し、曩に本會議が建議したる事項の實現に着手せられんことを望む。

大正十三年一月十二日提出の建議二件左の如し。

一、放送無線電話實施に關する建議

大正十二年九月の關東大震災火災に際し、最も痛切に其の必要を感じしめられたるは、通信機關と交通機關なりしが、就中斯かる事變に際し、効果の大なるものは、無線電信電話を措きて之を他に求むべからず、當時罹災地域に無線電信の設備を有するもの少からざりしも、危急に處するの準備に乏しかりしを以て、其の効果を發揮すること能はざりしは寔に遺憾に堪へず、政府は茲に鑑み新に都市計畫を實施するに當り、今後萬一の事變に臨みて動作の完全を期し、以て災害を低減せしめんが爲に、無線電信電話の普及を計ると共に、放送無線電話の敷設を斷行せられんことを望む。

二、地震研究促進に關する建議

濃尾大震災の苦き經驗に鑑み、政府は震災豫防調査會を設立し、之れが豫防に關する事項の攻究と其の施行方法の審議とを命じ、調査會は之を純理と應用の二方面より調査研究を行ひしも、經費の不足に依り大震災に抵抗し得べき、建築土木工事等の徹底的研究を進むること能はずして、圖らずも今次の大震災火災に遭遇したるを遺憾とす。然れども大震前より或は地殻潮水の異状を探り、或は土地の緩漫なる隆起沈下若くは微動を驗測し、或は地帯を精査して有感無感の前震を考察し、或は耐震火構造法を論究し、或は市街地の震動性能を調査して、各種構造物の補強を促さんと志せる幾多の學徒に對して、重要な經驗と研究資料とを與へたりと思考す。此際政府は速に特殊の研究機關を設け、各方面の人材を網羅し、國家百年の大計を樹てられんことを望む。

この放送無線電話實施と地震研究促進との建議を提出せられたる二日後、即ち大正十三年一月

十四日、先生樞密顧問官に任ぜられ、貴族院議員を始めとし、殆んど一切の公職を辭せられ、翌十四年三月又本會議會長をも辭せられしを以て、副會長理學博士櫻井錠二氏、先生の後任として會長の椅子に就き、同年四月の第八回總會に於て、先生への感謝狀贈呈を議決し、櫻井會長より之を呈せられたるもの左の如し。

工學博士男爵古市公威君本會議創立以來會長ノ重職ニ在リテ克ク會務ヲ統ベ其ノ發展ヲ圖リ學術ノ研究ヲ獎勵シ友邦ノ研究機關ト連絡ヲ密ニシ本會議ヲシテ内外ニ重キヲ爲サシム其ノ功績洵ニ偉大ナリト謂フベシ今回其ノ職ヲ辭セラレタルニ際シ本會議ハ總會ノ決議ニヨリ爰ニ蕪辭ヲ呈シ恭シク感謝ノ微意ヲ表明ス

大正十四年四月十六日

學術研究會議會長 理學博士 櫻井錠二

先生の會長を辭せられたる大正十四年、曩に建議せられたる事項中、地震研究促進の件は政府の容るる所と爲り、勅令を以て地震研究所官制を公布せられ、更に放送無線電話實施の件に就きても亦遞信省令を以て放送用私設無線電話規則を發布し、昭和六年三月、文部省は科學博物館を上野公園内に新設し、先生在職中の建議は着々實現を見るに至りたるは、本會議は勿論、先生も亦頗る本懐とせられし所なり。固より爾餘の建議諸項と雖、其の成否は常に學術上の進展に關するのみならず、國利民福の増進に至大の影響を與ふるものなるを以て、先生は會長を辭せられたる後も、尙之れが實現に努力せられたりしは、本會議の深く先生を徳とする所なりき。

二、理化學研究所

大正二年夏、工學博士藥學博士高峰讓吉氏米國より歸朝し、學者及び實業家の協力に依り、理化學研究所設立の急務なるを高唱せられ、斯界有力者の共鳴を促されしかば、六月工學博士高松豐吉氏は賛成者の會同を求め、其の席上男爵澁澤榮一氏座長と爲り、準備委員を推薦し、化學研究所設立に關する具體案を協議せしが、未だ遽に成案を得ず。大正三年三月に至り、澁澤男爵其の他實業家及び化學者連署して、化學研究所設立に關する請願書を貴衆兩院議長に提出し、政府も亦此趣旨に賛同せられしが、具體案を得るに先だち、同年八月歐洲大戰突發の餘波は日獨戦争となり、醫藥品、工業原料等本邦への輸入制限せられ、衛生上産業上多大の障害を來せしを以て、同年十月農商務省は化學工業調査會を設け、之れが善後策を講ずることとなれり。

是に於て工學博士高松豐吉、理學博士藥學博士長井長義、農學博士古在由直、理學博士櫻井錠二商工局長岡實、其の他の諸氏は、大正四年三月會合して、化學研究所を理化學研究所と改め、大體の方針と研究綱目等に就き協議し、爾來數回の會合を重ね、同年六月大隈首相官邸に第一回設立委員

會を開き、澁澤男爵、中野武營、高松、櫻井兩博士、上山農商務次官の五氏を特別委員に挙げ、具體的實行方法を審議し、十二月同委員會は、豫算を金八百萬圓とし、内金五百萬圓は民間に募り、金貳百萬圓は政府の補助、金百萬圓は宮内省の御下賜を仰ぐこととし、同五年一月理化學研究所設立に關する建議書を内閣總理、大藏、農商務の三大臣に提出せり。政府は之を容れ、理化學を研究する公益法人國庫補助に關する法律案を議會に提出したるに、同案は同年二月貴衆兩院を通過し、三月法律第十六號を以て公布せらる。

尋で七月首相官邸に六大都市の實業家を集め、設立協議會を開き、大隈首相河野農相の希望演説あり、澁澤男爵設立の經過を報告して、一同の賛成を求め、十月再び協議會を開き、大隈首相の指名に依り三十名の創立委員を選定し、澁澤男を委員長に、高松豊吉、櫻井錠二、團琢磨、和田豊治、大橋新太郎、中野武營の六氏を常務委員に委囑せり。大正六年三月、東京商業會議所に於て創立委員會を開き、財團法人理化學研究所の設立を農商務大臣に申請し、その許可を得たるを以て、茲に設立者總會を開き、澁澤男より經過を報告したる後、評議員を推薦せり。

是より先 伏見宮貞愛親王殿下を總裁に奉戴し、總裁宮殿下より男爵澁澤榮一、男爵菊池大麓兩氏を副總裁に、其の他顧問、評議員等委囑の御沙汰あり、同時に菊池男所長を命ぜられ、四月評議員會に於て、理事監事を選定す。同月畏くも學術及び産業御獎勵の思召を以て、大正六年度以降十箇

年間、毎年金拾萬圓即ち金壹百萬圓を帝室より下賜あらせらるる旨左の御沙汰を拜し奉る。

財團法人 理 化 學 研 究 所

一金 百 萬 圓

今般其ノ所設立ノ趣被聞食學術及産業獎勵ノ思召ヲ以テ御補助トシテ大正六年度以降十ヶ年間
年金拾萬圓宛即前記ノ通下賜候條

聖旨ヲ奉體シ 黽勉努力以テ其ノ目的ヲ遂成セムコトヲ期スヘシ

大正六年四月二十六日

同年十月古市先生は菊池所長薨去の後を承け、總裁宮殿下より所長並に評議員、理事の御委囑を蒙り、理事理學博士櫻井錠二氏副所長たり。大正八年十一月帝國ホテルに於て 貞愛親王殿下の台臨を仰ぎ、總裁奉戴式を舉行す、是日古市所長偶々病あり、櫻井副所長は左の式辭を代讀す。

式 辭

本所嚮ニ

殿下ヲ總裁ニ推戴シ奉リシニ允許アラセラル今ヤ本所ノ事業漸ク其ノ緒ニ就キタルヲ以テ本日
ノ嘉辰ヲトシ台臨ヲ仰ギテ奉戴ノ式ヲ舉グ

恭シク惟ミルニ理化學ノ研究ハ文化開進ノ根元物資増殖ノ基礎ニ居リ其ノ事業ハ以テ國家ノ盛

衰ニ關係ス今ヤ世界ノ大戦既ニ其ノ局ヲ結ヒ各國競ヒテ其ノ研究ニ務メ人文ノ進歩ニ貢獻シ産業ノ發展ヲ促進スルニ際シ我邦ニ在リテハ殊ニ大ナル努力ヲ要スルモノアリテ本所ノ任務益々其ノ重キヲ加ヘタリ此ノ秋ニ方リ公威等本日ノ盛事ニ遭遇ス何ノ光榮カ之ニ如カン茲ニ公威諸員ニ代リ謹ミテ榮恩ヲ謝シ奉ル

大正八年十一月二十六日

理化學研究所長工學博士 古市公威

次に總裁宮殿下左の令旨を賜ふ。

令 旨

理化學ハ文化ノ淵源富強ノ根本ニシテ之カ研究ヲ務ムルハ即チ國運發展ノ基礎ヲ鞏固ナラシムル所以ナリ貞愛此ノ趣旨ヲ以テ設立セラレタル本所ノ總裁ニ推サレタルハ深ク欣ヒトスル所ニシテ職員及有志ノ協翼ニ依リ本所ノ事業ヲ遂行シ邦家ノ爲貢獻スル所アラムコトヲ庶幾フ職員及協賛ノ諸員斯ノ意ヲ體シテ益々努ムル所アレ

大正八年十一月二十六日

大勳位功二級 貞愛親王

次に櫻井副所長は、左の古市所長の奉答文を代讀す。

奉 答 文

本日

殿下ノ台臨ヲ辱ウシ深厚ナル令旨ヲ賜ハル本所ノ光榮之ニ過キス公威不敏ト雖モ同志ト共ニ協力奮勵シテ

殿下ノ盛意ニ對ヘ奉ラムコトヲ期ス謹ミテ奉答ス

大正八年十一月二十六日

理化學研究所長工學博士 古市公威

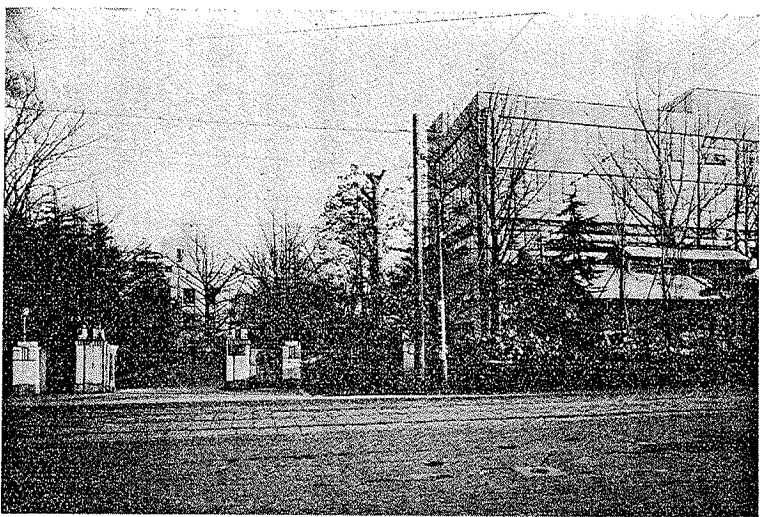
次に農商務大臣及び文部大臣の祝辭あり、總裁宮殿下台臨の下に午餐會を開き、終つて澁澤副總裁より本所設立以來の経過及び現況の報告、理學博士池田菊苗氏の製鹽に關する講話、並に研究生仁科芳雄氏の金屬膨脹計の實驗ありて式を畢れり。

斯くて研究所は地を小石川區駒込上富士前町に相して建築せられ、各種研究用設備を整へ、有爲なる學者を網羅して研究に着手し、其の結果の一部は、常に本所出版物を以て内外に發表せられ、成績見るべきもの頗る多く、所期の目的を達成すべき氣運に至れり。然るに歐洲大戦後の物價騰貴は、設備費の増加を來し、他方に於て一般寄附金は豫定の金額に達せず、爲に研究費に不足を訴

ふるに至り、而かも研究事項の増加と進歩とは、一層経費の増額を必要とするを以て、此間に於ける先生の苦心實に尠からざるものあり、終に國庫補助の増額を求むるの已むを得ざるを認め、大正十年二月理事會に左記申請案を提出せられたり。

國庫補助金増額申請案

大戦亂ノ教訓ト戦後世界ノ趨勢トニ鑑ミ歐米諸國ハ相競フテ理化學ニ關スル各種研究機關ヲ擴張シ之ガ經費ヲ増大シ又ハ新研究所ヲ増設スル等適切ナル施設ヲ爲スニ急ニシテ戦前ニ數倍スル努力ヲ以テ理化學ノ研究ヲ促進シ之ニ依リ益々産業ノ發達ヲ謀リ國富ト國防トノ充實ニ資セントスル狀況ナリ翻テ我邦ノ現状ヲ觀ルニ理化學ノ研究ハ依然トシテ振ハズ而モ唯一ノ理化學研究所タル本所ハ事業漸ク其ノ緒ニ



理化學研究所

就カントスルニ際シ事業費ニ大ナル不足ヲ生ズルニ至レルガ爲有ナル學者ヲ網羅シテ研究ニ膺ラシムルノ用意漸ク成リ且ツ研究室ノ建設ヲ整ヘ研究上遺憾ナカラシメンコトヲ期シタル所アルニ拘ラズ此ノ國家的事業ヲ十分ニ遂行スルコト能ハス之レ單リ本所ノ甚ダ遺憾トスル所ナルノミナラス亦以テ國家ノ一大恨事ト爲サ、ルヲ得ス而シテ此ノ状態ヲシテ徒ラニ推移セシメンカ産業ノ基礎タル理化學研究ニ於テ由來歐米諸國ニ後ルルト甚ダ遠キ我邦ハ更ニ益々彼レニ後レ世界ノ平和的競争ニ於テ常ニ敗者ノ位置ニ立チ又不幸ニシテ一朝事アルモ到底勝者タルコト能ハザルノ運命ヲ有スルニ至ルヘシ今ニシテ思フ茲ニ致シ國家樞要ノ機關タル本所ヲシテ健全ナル發達ヲ遂ゲシムルニ非ザレバ將來復如何トモスルコト能ハザルニ至ルベキヲ虞ル

本所設立計畫當時ニ於テハ御下賜金百萬圓政府補助金貳百萬圓一般寄附金五百萬圓計八百萬圓ノ資金ヲ得敷地ハ政府ヨリ無償交附ヲ受ケ建築及設備費トシテ約百萬圓ヲ投シ殘額七百萬圓ヲ基金ニ充テ之レヨリ生ズル收入約四拾萬圓ヲ以テ年々事業費ヲ支辨スル豫定ナリシガ抑モ此ノ計畫タルヤ歐洲大戦亂勃發前ノコトニ屬シ今日ニ於テハ研究用機械器具其ノ他諸材料ノ暴騰セル爲又職員ニ對スル給與ノ増額ヲ要スル爲單ニ設立當時ノ計畫ヲ遂行セントスルモ尙別紙豫算概算書ノ通年額百萬圓ノ支出ヲ要シ時勢ノ必要ニ應ジ之レガ擴張ヲ企畫スルニ於テハ更ニ數十萬圓ノ増額ヲ必要トスベシ而モ一方ニ於テハ一般寄附金ハ豫定ノ五百萬圓ニ達セズシテ僅ニ三百十餘萬圓ニ止マリ他ノ一方ニ於テハ敷地ノ購入ヲ要シ建築諸材料及工賃著シク昂騰シ更ニ設備費ニ於テ多大ノ經費ヲ要シタルトニ因リ建設費ハ敷地代ヲ合セテ三百六十餘萬圓ヲ要スルニ至レル爲基金トシテ僅ニ二百五十萬圓ヲ剩スノミニシテ收入ハ之レヨリ生ズル利息年額十六萬餘圓ナルニ過ギズ

右ノ事情十分御考察ノ上本所ノ事業遂行上遺憾ナカラムル様國庫補助金増額ノ儀御詮議相成度理事會ノ決議ニ依リ此段申請候也

大正十年二月

財團法人理化學研究所所長工學博士男爵 古 市 公 威

然るに此申請は結局政府の容るる所とならず、三月長岡理學部長の辭表提出と爲り、尋で池田化學部長も亦其の任に堪へずとし、端を茲に發して遂に古市所長及び櫻井副所長の辭表提出と爲り、九月理事會は事情止むを得ざるものとして、古市、櫻井兩博士の辭任を承認し、所長の後任には工學博士子爵大河内正敏氏を推薦することを決議し、之れが確定と共に古市、櫻井兩博士を顧問に推舉するに決し、澁澤副總裁より總裁宮殿下の御裁可を仰ぎ、同月三十日付を以て古市先生の所長、櫻井博士の副所長、並に兩氏の理事及び評議員を解きて顧問を委嘱し、是日新に大河内子爵を所長とし、且つ委嘱するに理事及び評議員を以てし、爾來今日に至れり。

抑も大正六年三月、菊池男爵は初代所長となりしも、其の任に在ること僅に半歲餘、此の間創業に際し、本所は未だ學界及び工業界に貢獻するの違あらざりしが、同年十月古市所長の就任以來、事業其の緒に就き、著名なる學者、新鋭なる學徒の多數を聘し、日夜専念其の研究を續行し、化學部長には理學博士池田菊苗氏、理學部長には理學博士長岡半太郎氏、研究員には理學博士眞島利行、

工學博士子爵大河内正敏、工學博士鯨井恒太郎諸氏、研究員補には理學博士飯盛利安氏外數名の博士學士を加へ、之れが研究の結果は本所刊行の出版物を以て發表せられ、特に外國語を以て發刊せらるる Scientific papers of the Institute of physical and Chemical Research の如きは、全世界著名なる研究所、大學、専門學校、圖書館等に備へ付けられざるはなく、此等外國語に依りて發表せられたる論文は、昭和六年に至りて既に三百餘篇に上り、日本語を以て刊行せらるる理化學研究所彙報に發表せられたるもの七百餘篇の多きに達し、其の他内外諸學會の雜誌上に發表せられたる論文も亦尠からず。固より此等の論文は、孰れも苦心研究の結晶ならざるなく、従つて自然界、科學界の神秘を開きて學界に貢獻し、或は之を實地に應用して新工業の發現を見るに至り、本所が昭和十一年末迄に本邦に於て得たる特許權は五百件、實用新案八十件の多きに上り、其の過半數は既に工業的に實施せられ、國利民福に寄與する所あり、且外國の特許權を得たるもの、既に百二十四件に達し、我國工業の海外進出の先驅を爲せり。就中先生の在職時代より着手せし研究の内、「ヴァイタミン」の研究、「アルマイト」の産業化、「マグネシウム」、「ピストン・リング」、理研式「アルミニウム」の製造の如き、既に工業的完全なる成功を收め、其の製品は遠からず輸入品を驅逐して輸出に轉向すべく、殊に「アルマイト」に對しては、歐米各國より特許權の讓渡を交渉し來れるありて、何れも世界的大研究と稱すべく、其の他今日未解決として殘されたる元素の相互變移、原

子の構造、量子説等、化學的物理學的諸問題、營養と國民保健、高壓及び高週波電流、精密機械、合金、輕金屬等、世界的並に國家的幾多の難問題に就きても、之れが解決の鍵を與へつつ、東洋の一角に一大研究所としての存在を出現繼續せるは、固より現大河内所長の十數年間に互る努力の成果なりと雖、亦創立當時世界大戰の影響を受け、財界の不安を來せるに際し、克く萬難を排して該研究所の基礎を築き上げられたる先生の功績に負ふ所尠からざるなり。

第四節 調査會其他

一、土木會及び關係調査會

土木會 明治二十五年六月、勅令第五十二號を以て、土木會規則を公布せらる。本會は内務大臣の監督に屬し、治水、修路、築港に關する重要事項に付、内務大臣の諮詢に應じ意見を開申し、且土木に關する事項に付、關係各省大臣に建議することを得る旨規定せられ、會長一人、委員二十人、及び臨時委員若干とを以て組織し、會長は勅任官を以て之に充て、委員は内務省、鐵道廳、農商務省、陸軍省、參謀本部、海軍省、逓信省の高等官、及び工科大学教授の中より任命し、土木監督署長は定

員外委員として會議に列席し、決議の數に加はることを得せしむ。即ち此規定に依り、明治二十六年六月、先生は本會委員仰付けられたり。尋で明治二十七年七月、一旦委員を免ぜられ、翌二十八年一月再び同委員仰付けらる。此間屢々規則を改正せられ、明治三十三年七月の改正には、本會任務の一なる築港事項を削除せられしが、同三十六年三月勅令第二十八號を以て、同年四月一日限り廢止せられたり。

抑も本會は先生が土木局長たりし時創設せられしものにして、治水、修路、築港等の事業が、各方面に涉り利害關係を有し、政治的經濟的影響頗る大なるを以て、廣く軍事交通産業の方面と緊密なる連絡を保ち、完全なる企業計畫を確立するの必要を認められたる結果なるは勿論なりとす、即ち大阪築港計畫の如き、其の他重要なる土木事業に對しては、本會議に諮問の上決定せられたり。従つて此等新事業に關し、先生が提案者として幹旋盡力せられし場合の多かりしも、亦言を俟たざる所なり。而して先生の蘊蓄深き學識と周到なる注意は、其の間に處し常に圓滿なる解決を與へ、事業遂行の緒を開き、各方面に永久的利益を均霑せしめたるもの尠なからざりしなり。

臨時治水調査會 明治四十三年全國各地方大水害の爲、未曾有の慘事を出現せしを以て、政府は同年十月、勅令第四百二十三號を以て本會官制を公布せらる。本會は内務大臣の監督に屬し、臨時治水に關する重要事項を調査審議し、關係各省大臣に建議することを得るものにして、會長は内務

大臣を以て之に充て、委員四十五人及び臨時委員若干は、關係各廳高等官、貴衆兩院議員、並に學識經驗ある者の中より内閣に於て之を命ずるものにして、同月先生は本會委員を仰付けられたり。

本會は審議の上、根本的治水の計畫を樹立し、其の計畫を河川改修と砂防の二工事に別ち、河川改修に於ては、河川法に依り國の直轄事業として改修を爲すべき河川を六十五川と定め、之れが施工時期を二期に區別し、第一期河川として利根・信濃・木曾・淀・九頭龍・吉野・庄・高梁・遠賀・北上・雄物・荒・阿賀野・富士・最上・神通・岩木・加古・綠・斐伊の二十河川を選び、第二期河川として天龍川を始め四十五河川を定め、改修の利益を可成的全國各地に均霑せしめ、又砂防工事は河川改修の計畫に伴ひ、直轄河川の流域に對しては國自ら之を施行するを原則とし、地方廳に於て施行するものに對しては、國庫より相當の補助を與ふることとせり。而して本會に於て決議したる計畫豫算は、第三十七回帝國議會の協賛を得、明治四十四年度より事業を遂行するに至れり。

爾來治水事業は着々進行し、第一期河川中既に竣功したるもの、及び竣功に近づきたるもの數箇川に達したると、一面には河狀の變遷、産業の狀況等、治水計畫上更に調査を必要とするものあるに至り、大正十年一月、勅令第十二號を以て第二臨時治水調査會官制を公布せられ、同月先生は再び同會委員仰付けられたり。此第二次調査會に於ては審議の結果、既に國に於て施行中の河川並に砂防工事の外に、前記第二期河川其他より五十七河川を選定し、大正十一年度以降二十箇年

内に施工せしむるを適當と認め、順次繼續事業として帝國議會の協賛を求むることとなり、全國治水計畫の基礎茲に確立するに至れり。此等の會議に於て、先生は斯界の長老として常に指導的態度を以て議事の審査に當られ、克く本會の目的達成に努力せられたり。

港灣調査會 明治三十三年六月、勅令第二百六十二號を以て港灣調査會官制を公布せられたるも、明治三十六年三月廢止せられ、明治四十年六月勅令第二百四十三號を以て、再び同官制を公布せらる。本會は内務大臣の監督に屬し、港灣に關する制度、計畫、設備、其他重要なる事項を調査審議するものにして、會長一人、委員二十五人、臨時委員若干を以て組織し、内務大臣を會長に充て、委員は關係各廳高等官及び學識經驗ある者の中より命ぜられ、先生の本會委員仰付けられたるは、明治四十四年九月にして、大正十三年本會の廢止に至る迄其の任に當られたり。

本會は當初本邦の港灣を三種に分ち、第一種は國に於て修築するもの、第二種は地方起工のものに對し國庫より相當補助を與ふるもの、第三種は地方の獨力經營に委すべきものとして區別し、第一種港として横濱・神戸・關門海峽(門司・下ノ關)・敦賀の五港を選び、第二種港として東京・四日市・大阪・鹿兒島・長崎・境・新潟・船川・青森・鹽釜の十港を選びしが、其の後更に名古屋・清水・若松・伏木等の十七港を加へたり。

本會は此等重要港の選定は勿論、築港設備の計畫に對しては、其の新築、改築、除却の工事を始

め、港灣利用上著しき影響を及ぼすべき事業に關し、内務大臣の諮問に應じて慎重に其の適否を審査し、港灣設備の改良に貢献せし所頗る大なるものあり、殊に先生は學識と經驗とを以て委員間に重きを爲し、本會の決議が常に斯界に最も重要視せられたるは、先生の指導に依ること多かりしは言を俟たざるなり。

道路會議 大正八年四月道路法公布に伴ひ、政府は同年六月勅令第二百八十一號を以て道路會議官制を發布せり。本會議は内務大臣の監督に屬し、其の諮問に應じ、道路に關する重要な事項を調査審議するものにして、議長一人、議員三十五人以内を以て組織し、必要ある場合には、臨時議員を置くこととし、内務大臣を議長とし、關係各廳高等官及び學識經驗ある者の中より議員を命じ、先生は同年八月道路會議々員仰付けられたり。政府は本會議に諮問して意見を徵し、道路改良計畫を樹立し、道路公債法を制定し、本邦の道路改修に着手せり。此計畫は國道及び重要府縣道に對して一定の改修標準を定め、國費を以て軍事上の目的を有する特殊國道を改修するの外、地方費支辨の一般國道に對しては工費二分の一、主要なる府縣道及び東京・京都・大阪・横濱・神戸・名古屋各市街路の改良に對しては、工費三分の一を國庫より補助する方針に依り、大正九年度以降三十年間に亘り、専ら公債を財源として國費金貳億八千貳百八拾萬圓を支出せんとするものにして、其の内容は特殊國道七十二里、此改修費金六百八拾萬圓、一般國道延長千七百七十五里、橋梁延長三十

六里、此改修費補助金壹億六千六百八萬餘圓、主要府縣道四百里、此改修費補助金壹千七百萬圓、六都市街路改良費補助金八千九百參拾萬圓、土木試驗費及び監督費金參百六拾壹萬餘圓と豫定せり。

此改良費豫算は繼續費に非ざるも、一定の年度割を以て支出し、財源は道路公債法に依り、毎年度豫算の範圍内に於て、公債を募集し之に充當することとなりしが、大正十二年關東大震災以降は財政緊縮の爲、豫算を減縮し、同十四年以後は一般歳入を之が財源に充て、公債募集を中止せり。其の後昭和三年に至り自動車の發達に鑑み、地方産業の發展と交通能率増進の爲、指定府縣道六千里中、重要なるもの千五百里を選びて改修を施すこととし、其の工事費金壹億八千萬圓に對し、昭和四年度以降十箇年を期し、國庫より工費三分の一を補助する所謂産業道路計畫を定め、從來の道路改良費に一時増額を來たせしも、政府財政上の關係より再び緊縮を加へられ、減額して今日に及べり。元來道路法の制定は、先生の土木局長時代よりの懸案なりしが、其の實施を見るに當り、先生は更に本會議々員として重要會議に參加盡力せられ、本邦道路改修の根本方針決定に對し貢獻せられし所尠なからざりしなり。

二、震災豫防調査會及び同評議會

明治二十四年十月の濃尾大震災は、國民をして戦慄せしめ、殊に文化的建築物たる煉瓦造家屋の崩壊、堅牢を以て稱せられたる長良川及び木曾川鐵橋の墜落の如きは、土木及び建築界に與へたる一大脅威にして、識者の間に期せずして地震に關する國立調査會の設立を要望するに至り、貴族院議員菊池大麓博士は、古市先生等五十二名の賛成者を得て、同年十二月之が建議案を貴族院に提出し、院議直ちに可決したる結果、明治二十五年三月、政府は先づ古市先生を始め、平田東助、菊池大麓、和田維四郎、辰野金吾の五氏に調査會設立取調委員を命じ、六月に至り勅令第五十五號を以て、震災豫防調査會官制を公布せり。本會は文部大臣の監督に屬し、會長一人、幹事一人、委員二十五人より組織せられ、會長は勅任官を以て之に充て、委員は理學及び工學専門の學者より、幹事は委員中より之を命じ、震災豫防に關する事項を攻究し、其の施行方法を審議せしむるを目的とす。同七月帝國大學總長加藤弘之博士は最初の會長に任ぜられ、同時に古市先生は、菊池大麓、小藤文次郎、辰野金吾、關谷清景、巨智部忠承、田中館愛橘、中村精男、長岡半太郎、田邊朔郎、大森房吉の諸氏と共に委員を命ぜられ、菊池氏幹事たり。尋で和田維四郎、眞野文二、井口在屋、片山東熊、中村達

太郎、曾禰達藏の諸氏、其の後更に田丸卓郎、山崎直方、中村清二、今村明恒、寺田寅彦、佐野利器の諸氏を委員に加へ、着々として調査研究の歩を進めたり。

本會の使命たる研究目的は、(一)如何なる材料、如何なる構造は、最も能く地震に耐ふるものなるか、(二)建物の震動を軽減する方法ありや、(三)如何なる種類の建物は危険なるか、其の取締法如何、(四)日本に於て如何なる地方は震災最も多きや、(五)如何なる地盤は最も安全なりや、(六)地震を豫知する方法ありや否やの六項目にして、之を分類すれば、地震を豫知する方法の有無、地震に對し其の災害を極度に軽減する計畫の研究に在るを以て、委員會は更に詳細なる調査計畫を樹て、既往の地震史、地質學上の調査、地震動の性質及び傳播速度、地上と地中の震動比較、磁力の關係、緯度の變位、地下の溫度、重力の分布及び變遷等の研究測定、並に耐震構造物の計畫、構造材料の強弱試験等を行ふこととしたるが、各委員の努力に依り調査着々進行し、數年ならずして應用方面の研究は殆んど使命を全うするに近き好成绩を擧ぐるに至り、殊に耐震的建築の手法は諸外國の注意を惹きたり。此間明治二十七年六月の東京地方地震、同年十月山形縣庄内地震、同二十九年六月三陸大海嘯、同年八月陸羽地震等の續出は、大いに調査上に便宜を與へたり。以上を本會調査研究の第一期とすれば、第二期に入りては、地震計の改良と相俟つて、地震並に地震動の性質闡明と計測とにつき非常の發達が遂げられ、又明治三十八年の臺灣地震、同三十九年の臺灣地震、同

四十二年の姉川地震、大正三年の鹿兒島及び秋田縣仙北地震、同七年の信濃大町地震、同十一年長崎縣島原地震等に於て、各地方建築上の固有の短所が指摘せられ、明治三十八年の印度地震、同三十九年の桑港地震、同四十一年の「メッシナ」地震に就きては、地震・建築・土木の諸學科方面より實地調査が試みられ、殊に桑港地震に於ては、新式の鐵筋コンクリート及び鐵骨の大建築物が、最も嚴重なる試練に遭遇したるを以て、我調査委員の之に關する收獲は頗る大なるものありたり。此間又日本の各火山相次いで活動を始め、伊豆大島・櫻島・淺間山・有珠山等の噴火あり、此等噴火の場合を始めとし、濃尾大地震其他各方面の地震に對し、土地の微細なる水準變更の調査が行はれ、且火山地方の地質調査も進行し、最初の研究問題として各種地盤に於ける地動比較の外、大抵調査の目的を達したり。既にして大正十二年九月一日關東大震災の突發するに至り、其の以後の事蹟を第三期とす。

關東大震災損害の九割五分は火災なり。是より先、明治三十八九年の交、委員は東京大地震の將來を慮り、消防施設の用意を怠るに於ては、大火災に依り市の大部分を焼失せしめ、幾萬の死者を生じ得べきことを論じ、之を未然に防ぐ手段を講ずべきことを當局者に警告し、且水道鐵管の破壊さるべきを覺悟するの必要あるを力説したるが、其の効なくして遂に大震災に遭遇し、不幸なる豫測と略ぼ一致するの結果を見たるを遺憾とす。

爾來本會は屢々委員會を開き、帝都復興に關する左記注意書を發表し、當局者の參考に供せり。

- 一、耐震火構造、即ち大地震に遭遇して能く之に耐へ、又其後も依然として耐火性を失はない家屋橋梁等の構造様式の標準を定むること。

- 二、耐震火家屋を列ねて防火線とし、之を大道路の兩側に配置すること。

- 三、防火或は避難用として、大道路・地下道・溝渠・瀦水池・公園等を改修或は新設する場合に於ては、地質或は震度分布、東京に於ける風の習性、防火に適する樹木の種類等を顧慮すべきこと。

- 四、大地震の際、發火の原因となるべき化學藥品の保管法、爐火・電氣・瓦斯・石油・焔爐等の取締法、並に臨機處置法を定むること。

- 五、延焼を助長すべき築造物、例へば高き建物又は屋上に於ける可燃性構造の如きものの取締法を定むること。

- 六、消防用の水利を興すこと、又現在消防に使用し難き流水止水に於ては、至急其の利用の途を開くこと。

- 七、地震並に之に歸因する火災につき、市民の訓練を奨むること。

以上の注意書は、大震災火災後、各委員が鋭意調査の結果にして、之れが内容の具體案は、其の後、地震篇、地變津浪篇、建築篇上下二冊、土木及び其の他の工作物篇、並に火災篇とを出版せり。當時氣象臺及び大學等よりも、有益なる多くの調査報告ありしが、震災豫防の見地より作成せられたる調査報告としては、前記本會の出版物を以て白眉とす。之れと同時に本會は、將來の地震調査機關として更に一步を進め、専門的學術研究を開始すべき擴張計畫を企圖し、案を具して當局の注意を促

したるが、其の結果本會の建議案は、大正十三年の帝國議會を通過し、之に關する豫算案も亦成立せり。是に於て大正十四年十一月、地震研究所並に震災豫防評議會官制の公布と爲り、同時に震災豫防調査會官制は廢止せられたり。

震災豫防評議會は即ち震災豫防調査會の一部繼續なるを以て、古市先生を始め前委員の大部分は新に評議員に任命せられ、文部次官を會長とし、文部大臣の諮問に應じて、震災豫防に關する重要な事項を審議し、必要と認むる時は、其の事項を關係各大臣に建議するを本會の目的とし、從來震災豫防調査會に於ける地震の學理、及び震災豫防に關する研究事項は、新設の地震研究所に於て繼承し、漸次之を擴張せられたり。地震研究所は東京帝國大學に附設せられ、專任研究の教授助教授十數名之に當れるが、重要な實際問題に遭遇する場合は、震災豫防評議會は地震研究所と連絡を取り、評議員會の議を経て幾多の注意書を發行し、以て震災の防止輕減を企圖しつゝ、今日に及べり。

古市先生は明治二十五年震災豫防調査會設立當初よりの委員として、又震災豫防評議會の評議員として、其の薨去に至る迄前後四十餘年間、本會の爲に盡力せられ、擔當委員を獎勵鼓舞せられたるは特筆すべく、委員中官職の變更あれば、概ね委員を辭するに至れるにも拘はらず、先生は終始を一貫せられ、震災豫防評議會の成るに及びても、樞密顧問官の顯職に在りて、纔に勅任官を會

長とする本會の一評議員たるに甘んぜられ、其の評議員會には殆んど缺かさず出席し、長老として種々指導せらるゝ所ありたり。晩年耳聾せられ、會議の席上發言せらるるは稀なりしも、八十歳の高齡に達しても勉めて出席せられ、會の内部の協議には必ず先生を煩はせり。例へば此研究は何人をして當らしむるか、此組織は如何に改正すべきかの如き諸問題は、一々先生の指導を得て内定し、然る後會議に提出して可決確定するを常としたりとは、帝國學士院會員にして、曩には震災豫防調査會委員たり、現に震災豫防評議會幹事たる理學博士今村明恒氏が、衷心より先生の徳を讃へらるる所なり。

三、鐵道會議及び關係調査會

鐵道會議 明治二十五年六月法律第四號鐵道敷設法の公布と同時に、勅令第五十一號を以て鐵道會議規則を發布せられたり。本會議は主務大臣の諮問に應じ鐵道敷設法第十五條の事項を始め鐵道及び之れに關聯する事項を審議するものにして、議長一人議員二十人（昭和五年七月勅令第二百二十九號を以て三十人以内と改む）臨時委員若干より成り、各議員は關係各廳高等官、貴衆兩院議員、鐵道事業に多年の經驗を有する者、及び學識經驗ある者の内より選任せられたり。

先生曩に貴族院議員として同院の鐵道敷設法審査に當るや、特別委員となり、副委員長として盡力せらる。其の後明治三十一年十一月遞信次官就任と同時に鐵道會議々員となり、翌三十二年六月同會議々長仰付けられ、同三十三年十月遞信次官の辭職と共に一旦其の任を解かれたるも、大正十一年七月再び同議員を仰付けられ、昭和八年七月に至るまで十餘年間引續き在任せられたり。其の間、鐵道豫定線路の變更、工着手の順序、及び其の都度募集する公債金額等の決定、又は地方鐵道及び軌道の買収、補償、並に併行線の免許等に關し審議に参加せられ、常に國防整備、産業發達、鐵道經濟、國家財政等、大乘的見地より鐵道敷設の緩急を愆らざるべく、努力貢獻せられたる所頗る多し。

鐵道國有調査會 鐵道國有の問題は多年の懸案にして、政府は明治二十四年第二回帝國議會に私設鐵道買収法を提出し、引續き第三回議會に再び提案せしも成立せず、時日を経過せしに、明治三十二年第十三回議會に於て、衆議院は院議を以て、鐵道國有の實を擧ぐる爲、適當の法案を定め、議會に提出せられんことを望む旨建議せり。茲に於て政府は同年二月勅令第四十三號を以て鐵道國有調査會規則を公布し、更に慎重具體案を調査することとなれり。本會は内閣總理大臣の監督に屬し、私設鐵道買収に關する事項を調査するものにして、會長副會長各一人、委員二十五人以内とし、外に臨時委員を置くことを得せしめ、委員は關係各廳高等官、貴衆兩院議員、及び鐵道經濟に關し學識經驗ある者の内より選任し、先生は遞信次官として其の委員を仰付けられたり。本調査會は買収すべき鐵道會社の經濟狀態、其の線路の現況、買収の順序方法、時期、價格、並に財源、及び一般經濟界に對する影響等を充分に調査研究し、翌三十三年二月鐵道國有法案及び私設鐵道買収法案を具して山縣内閣總理大臣に答申せり。而して政府は直ちに此兩法案を決定し、第十四回帝國議會に提出せしが、衆議院は特別委員に附託したるのみにして遂に議決を爲すに至らず。爾來當局は引續き調査を進め銳意其の成立に盡力したる結果、明治三十九年鐵道國有法案として貴衆兩院の可決するところとなり、同年三月法律第十七號を以て公布せられたり。當時此法案の貴族院に回付せらるるや、先生は議案審査の特別委員に指名せられ、同委員會並に本會議に於て論争大に努め、本案通過を容易ならしめたる勞尠なからざるものあり。又本會の調査が國有の實行に當り參考資料として最も重要なりしは、固より疑を容れざる所なり。

廣軌鐵道改築準備委員會 本會は政府が第二十七回帝國議會に提出したる東京・下關間鐵道廣軌改築案に對し、衆議院の慎重なる調査を加へんとの希望を容れ設置せられたるものにして、此廣軌鐵道改築準備委員會官制は明治四十四年四月勅令第八十六號を以て公布せられたり。本委員會は内閣總理大臣の監督に屬し、帝國鐵道の廣軌改築準備に關する重要事項を調査審議するものにして、會長、副會長各一人、委員四十名以内を以て組織し、外に臨時委員を置くことを得せしむ。而

して會長は内閣總理大臣、副會長は鐵道院總裁、委員は關係各廳高等官、貴衆兩院議員及び學識經驗ある者の中より選任せられ、古市先生も亦其の一員たり。斯くて其の第一回委員會に於て調査事項を分類し、

- 一、廣軌狹軌の利害得失、及び東京・下關間以外に於ける廣軌改築に關する調査。
- 二、廣軌改築と財政上の關係、及び經濟上に及ぼす影響。
- 三、水陸連絡及び廣軌改築の爲に狹軌鐵道の普及に對する影響、其の他の件。

の三科となし、各特別委員を選び分擔調査を進め、先生は特別委員として工學博士仙石貢氏等と共に主として第一項の調査に當られ、拮据精勵約二ヶ月半の間に無慮二十數回の會議を重ね、此種重要調査會に類例なき進捗を遂げ、七月分科會の調査報告を提出せられたり。越えて八月、本委員會は全會一致を以て、東京・下關間廣軌鐵道は、工費豫算金貳億貳千七百八拾九萬六千圓とし、明治四十五年以降十二箇年繼續事業と爲すは、目下の財政及び經濟狀態に照して穩當なりと議決し、且附帶建議として（一）東京下關間廣軌改築期限を繰上げ、次で他の本州線に及ぼす件、（二）本州線以外の鐵道に對しても、廣軌改築の調査を爲すの件、（三）鐵道材料の需要に應ずる爲、内地工業の發展を圖る件、（四）産業發達の目的の爲鐵道を活用し、並に重要輸出品に對する運賃其の他を鹽梅し、輸出を獎勵するの政策を確立する件、（五）港灣に對し關係各官廳間に圓滿なる連絡を得るの目的を以て、行政の統一整理を行ふ件、（六）港灣修築の計畫と廣軌鐵道改築との歩調を一にし、水陸運輸連絡の安全を期する件を可決確定して、會長より之を桂内閣總理大臣に報告せり。然るに同月内閣の更迭となり、新内閣は行政及び財政の整理を標榜し、翌年度豫算を編成するに當り、一切の新事業を延期すると共に、廣軌改築も亦財源上見込立たずとの理由を以て、之を實行せざることに決し、終に其の實現を見るに至らざりし。

四、製鐵事業調査會

明治二十八年、榎本農商務大臣は製鐵所創立案を帝國議會に提出し、之が通過を見たるを以て、翌二十九年製鐵所官制の發布と爲り、爾來工場の新設、設備の完成に數年を費し、同三十四年に至り作業を開始したり。而して古市先生は創立當初より關係せられ、殊に準備時代に於て種々斡旋せらるる所ありき。然るに作業開始の後幾もなくして、技術上並に經濟上、非常なる困難に遭遇し、所期の成績を擧ぐる能はざるのみならず、豫算に不足を生じて、操業に滯滞を來たし、一時熔鑛爐作業を中止するの餘儀なきに至れり。是に於て世論の一部には國家に少からざる損害を與ふるものとして非難し、帝國議會に於ても製鐵事業は果して我邦に成立するものなりや否やの問

題起りたるを以て、明治三十五年六月、政府は製鐵事業調査委員會を設けて、根本的に其の成否を検討する事となり、古市先生に委員長を囑託し、委員には工學博士松本莊一郎、同長谷川芳之助、同三好晋六郎、同渡邊渡、同眞野文二、法學博士阪谷芳郎、近藤基樹、島川文八郎、安廣伴一郎、子爵内藤政共、堀田連太郎、門脇重雄諸氏の如き各方面専門の權威者を網羅したるが、尋で内藤子爵の逝去に依りて子爵堀田正養氏を同委員に補し、更に工學博士渡邊芳太郎、同進經太、栗原亮一の三氏を加へて、委員十五名を算せり。是に於て古市委員長は調査事項を四部分ち、第一部一般計畫、第二部採鑛冶金、第三部機械及び電氣、第四部運輸土木及び建築とし、各委員の分擔を定め、爾來半歳に互り、原料鑛山並に工場設備の實地に就きて詳細なる視察研究を遂げ、既往に於ける不成績の主なる原因と、之れが匡救の方法等に關し、各部協議會並に委員會を開くこと幾十回なるを知らず、各委員は屢々激論を闘はして議容易に一致せず、此間に處し委員長たる先生は、能く之を渾和融合して調査を進め、其の裁斷宜しさを得て、遂に結論に到達し、同年十二月二十七日、調査報告書を平田農商務大臣に提出したり。報告書の大要は左の如し。

不成績の主たる原因は、工事の順序、豫算の按配を誤りたると、機械装置の不完全なりし等、施設の順序方法宜しきを得ざるにあり。然れども之を歐米先進國が該事業に對する幾多の蹉跌を経て、以て今日の盛大を致せる

所以を鑑みれば、一たび我製鐵所の失敗に依りて危惧の念を抱き、遂に我邦には成立すべからざる事業として斷念するが如きは、大早計たるを免れず。何となれば此の一敗は、當事者其の人の失策にして、製鐵事業其の物の不可能なるが爲に非ざればなり。故に今日に於て改めて事業全體の方針を定め、秩序を正し、組織を變更し、専ら經濟上獨立自營の基礎を確立せば、斯業の成立は毫も疑を容れざるを以て、既往の損失は國家が製鐵事業の試験費として投じたるものと見做し、新に法人組織に改め、且設備完成の爲、今後四箇年間に金六百參拾九萬餘圓の支出を爲すべし。蓋し法人組織とするは、國家の經營を非とするにあらずして、國家經營に伴ひて必然避くべからざる會計法規の羈絆を脱すると共に、事業の促進、商業取引上の便益あるに依ると爲し、併せて國家が之を保護すべき方法に論及し、且炭山及び鐵山に對する計畫、並に營業收支の見込等を述べ、併法人組織たる日本製鐵會社法案、並に同會社に對する命令要件を起草して參考に供したり。是に於て政府は報告書の意見に基き、萬難を排して八幡に於ける製鐵事業遂行の方針を執り、再び熔鑛爐の煙突より黒煙を吐くを見るに至れり。爾來原料の研究選擇と、製鍊及び壓延作業の熟練とを積み、年を逐ふて増加する鐵材の需用に應じ、數回に互りて之れが生産設備を擴張すると共に、一方民間に於ける斯業を指導啓發したり。而して先生は常に該事業の前途を顧念し、其の進歩發達を希望して止まず、製鐵所員を見る毎に、必ず問ふに作業の現状を以てせらる。斯く萬噸なりしもの、三十年後の今日三百五十萬噸の多きに及び、約二十倍の躍進を見るに至り、略

ば自給自足の域に達し、尙益々之が基礎を鞏固ならしめ、國防上産業上亦遺憾なきを期するを得たり。是れ固より作業當事者の忍耐努力に待つ所なりと雖、其の初め我邦に於て斯業の興廢を決せしめたる調査委員會の委員長として、古市先生が終始周到なる注意を以て研究せられたる功績を逸すべからざるなり。

五、足尾銅山鑛毒事件調査會

足尾銅山に水源を發せる渡良瀬川は、舟楫の便、灌漑の利に富み、沿岸美田相連りしが、近年銅山に於ける採鑛製鍊事業の發展に伴ひ、山地森林は濫伐と煙害の爲に荒廢し、下流川筋は流下する鑛毒に禍せられ、魚族は斃死し、沿岸良田は不毛地に化せんとす。明治二十四年第二回帝國議會に於て、衆議院議員田中正造氏は鑛毒事件として本問題を議場に紹介し、其の後年々議政壇上に呼號せられしも、未だ世人の注意を惹くこと多からざりしに、偶々明治二十九年九月渡良瀬川水源地方に襲來せし稀有の豪雨は、一日間の雨量實に平年に於ける一箇月の雨量に相當するが如き多量に達し、爲に鑛毒を含みたる洪水は沿岸到るところに氾濫し、耕地全く不毛に歸せしもの少なからず、沿川住民期せずして起ち、大舉して帝都に出訴せんとし、世論も亦囂々として之

れが救済を絶叫せり。是に於て政府は善後策を講ずる爲、明治三十年三月足尾銅山鑛毒事件調査委員會を設け、法制局長官神輿知常氏外十六名に委員を命じ、慎重審議を重ねられしが、古市先生も亦其の委員の一人なり。同年五月政府は委員會の決議に基き、鑛業條例第五十九條に依り、直ちに鑛主古河市兵衛氏に對し除害防毒の施設を命じ、川筋には鑛毒の流出を防ぎ、森林には煙毒の輕減に努め、同時に渡良瀬川水源地の造林及び被害地免租處分の訓令を發して罹災民を救助せり。當時古河氏に命ぜられたる鑛毒豫防設備の大要左の如し。

本山有木坑及び小瀧坑水は一切之を流出せしめず總て選鑛用に供し、生石灰乳の攪拌法を行ひ、砂聚器を通過せしめたる後、順次之を沈澱池及び濾過池に導くべし。又通洞坑水は生石灰乳の攪拌法を行ひたる後、宇中才に新設する沈澱池に導くべし。此等の沈澱池及び濾過池は、本山千二百坪、小瀧千坪、中才千八百坪以上となすべし。各沈澱池及び濾過池の泥滓は煉瓦製造又は製鍊等に利用するの外、通洞附近指定の場所に運搬堆積し、堆積場の面積は三千坪以上とし、周圍に石垣を設け、滯溜水は之を沈澱池に導くべし。

鏝及び捨石は各四箇所の指定地に堆積し、溝渠又は隧道に依り堆積場に雨水及び溪流の浸入を防ぎ、且堆石崩壞を扞止する設備をなし、其の他の捨場は自今之を廢止すべし。

地表に於て新に開坑し又は苗坑の取明をなさんとするときは豫め認可を受け、苗坑より流出する坑水にして有害と認むべきものは、其の流出を防止し、又は沈澱池に導くべし。

本山及び小瀧に於ける製鍊所各煙突は、煙道を以て之を連絡し、煙室を設けて亜硫酸及び煤烟を凝結降沈せし

め、且硫酸製造其の他脱硫の方法を以て亜硫酸瓦斯を除却したる後、山腹より更に大煙道に依り山頂指定の地に至り、本山に於ては高八十尺以上、小瀧に於ては高五十尺以上の煙突を設け噴煙せしむべし。鑛石及び緩の野焼は認可を受くるに非ざれば操行するを得ず。

以上の設備其の他除害に關する附帯施設は各期限を定め、最長期百八十日以内に於て實施せしめ、本命令書の事項に違背するときは鑛業を停止せしむる旨を嚴命し、古河氏は直ちに豫防工事に着手せしが、竣工までには其の使用せし人夫賃金四拾七萬餘圓、食糧費金拾五萬圓、工事材料費金四拾貳萬餘圓に達せりと云ふ。而して此防除害の施設及び其の取締の勵行と、其の後政府に於て大規模に着手せられし渡良瀬川改修工事の竣工に依り、耕地山林は共に鑛毒の災及び洪水の害を免れ、今や全く其の面目を一新するに至れり。

六、度量衡及び工業品規格統一調査會

度量衡及び工業品規格統一問題に就きては、夙に古市先生の注意せられし所にして、殊に度量衡は之を「メートル」式に統一すべきことを主張し、其の貴族院議員たる關係上、工學會及び十二學會を代表して貴族院に建議せらるる等、大いに盡力せられ、政府當局も之に動かされ、遂に大正八

年六月、度量衡及び工業品規格統一調査會の官制成り、之れが調査委員として先生等二十八人を選定任命し、政府は同調査會に諮問して、其の議決に待ち之を實行するの方針を採れり。此會議は約一箇年半に亘りて一たび終了し、大正十年一月、政府は度量衡に關する同會の議決を政府案として帝國議會に提出せり。當時同會委員の一人今泉嘉一郎氏は衆議院に在り、古市先生は貴族院に在り、貴衆兩院は政府提出案を審議せんが爲に各特別委員會を設け、先生は貴族院、今泉博士は衆議院に於て、共に委員長に選定せらるべしとは、議會内一般の空氣なりしが、其の決定を見るに及びて、今泉博士は豫想の如く衆議院の委員長と爲り、先生は事故ありて委員長たらざりしも、同案は事なく議會を通過せり。

同大正十年九月、政府は又工業品規格統一調査會を組織し、先生は再び委員に任命せられ、工業品規格の實際的調査に着手せり。此會議に於ては細密に互る問題頗る多く、従つて議事は常に長時間を要せしも、重要な問題には先生努めて出席し、議事の進行に盡力せられたり。又毎年の總會に參會せられ、總會後の晚餐會に於て、先生は必ず委員を代表して挨拶を述べられたるが、其の要旨を擧ぐれば、余は委員として何等爲す所なきも、唯總會には必ず出席して響應を受くるのみ、所謂總會荒しなりと、先づ諸諺一番、然る後襟を正して曰く、規格統一調査委員會は、全力を盡し勉勵其の任に當りつつあり、政府は宜しく委員會の決議事項を實行するに努むる所なくんば不可な

りと。先生の此言、毎回の總會に於ける挨拶にして、語極めて簡なりと雖、寸鐵能く當局大臣の肺腑を衝ける警句なり。固より政府は委員會の決議事項を實行すべく、決議ある毎に官報を以て之を布告す、然れども實際に於ては徹底的に實行せられざるの憾みあり、先生之を指摘せられたるものにして、直言憚らざる所、先生の面目躍如たるものあるを見る。

初め此調査委員會の設立せられ、二十八人の委員の任命ありしより、最近昭和八年に至る迄茲に十五年、調査會は依然として繼續せられたるも、委員として從來の如くなるは、僅に先生と加茂、今泉の三博士のみなりしに、昭和九年一月又先生を喪ひて轉た寂寞の狀あり、調査委員會の爲にも洵に惜まざるを得ざりき。

七、其の他の學會協會

先生は叙上の學會、協會、調査會以外、關係せられたるもの尙甚だ多しと雖、今左に其の二三を掲ぐるに止め、他は之を省略す。

學士會 明治十九年七月本會の成立を告ぐるや、新に會則第十條に依れる委員三名を選舉せしに、先生及び矢田部良吉、大澤謙二の三氏其の選に當り、茲に本會創立後最初の委員として會務を執掌せられ、翌明治二十年二月第一號學士會月報を發行し、同年七月の第一回總會に於て、先生は七月七日現在の會計狀況並に會員數を報告せられたるが、當時在東京會員百四名、地方百十八名、合計二百二十二名にして、是れ實に本會々員數第一回の發表なりき。尋で同年十二月第二回總會に於て委員三名を十五名とするに決し、直ちに之れが選舉を行ひたる結果、先生等十五氏の當選を見たるが、此選任方法は學部別に依り各三名を選出したるものにして、五十年後の今日と雖、此選出方式は不易の原則として實行せられつつあり。次に明治二十一年八月第一回會員氏名録を發行せしに、當時の會員數は四百八十四名なりき。越えて明治二十三年二月臨時總會に於て、學士會通俗學術講演會を開くに決し、先生も委員の一人に選ばれ、同年七月第三回内國勸業博覽會の開催を機とし、第一回通俗學術講演會を東京に開きたり。其の後本會規則を改め同一人にして二期引續き委員たることを得ることとなり、先生は明治二十七年七月改選の際退任せらる。初め先生第一回委員に擧げられしより茲に至る迄八年有餘、此間本會の爲に盡瘁せられたる所頗る多く、昭和十一年七月創立滿五十周年を迎へ會員數は四萬を超過せるを見るの時、顧みて創立當初の委員たりし先生等の勞を想はずんばあらざるなり。

萬年會 本會は産業に關する學術の普及と其の研究を促進せんとする趣旨を以て明治十八年四月創立せられたり。蓋し産業の隆昌は富強の基礎にして、之れが研究は又實に經國の要務なるに

鑑み、渡邊洪基、大島圭介、榎本武揚、花房義質、柳原前光、石黒忠憲、由利公正の諸氏茲に着眼し、本會の創設及び經營に當り、或は農工業に關する講話會を開き、又は機關雜誌を刊行する等、本會の目的遂行に努めたりしが、畏くも皇室の御下賜金を辱うしたるを以て、益々本會の基礎を鞏固ならしめ、創立滿二十五年に際し法人組織に改めたり。然るに其の後各種専門學會の設立せられたる結果、本會の規模を縮め陣容を新にし、古市先生を會長に、高松豊吉、吉川祐輝兩氏を理事に、佐々木忠次郎、村田一郎兩氏を監事に推薦し、資金の利子を學術研究の補助に充つるの計畫を立て、一面には本會の存續を計るに努め、工業獎勵資金を日本工學會に寄贈し、日本工學會は之を金屬材料のX線の試験の研究補助に充てたり。既にして昭和三年本會創立滿五十年に當り、古市會長は記念品を作製して會員に頒ち本會の前途を祝福せられたり。

航空研究所、其の他 歐米各國に於ける航空學の進歩、飛行機の改良は最近異常の發達を來せしを以て、當時帝國學士院第二部々長としての古市先生は航空問題に關し深く考慮せらるる所あり、之れが獨立研究所を設立するを必要なりとし、山川健次郎男と協議して航空學研究の權威者たる田中館愛橋博士に囑するに貴族院談話會に於ける説明の勞を以てし、久保田讓男も亦貴族院議員として共に盡力せられ、之を端緒として航空研究所設立の必要は一般に認められたり、即ち航空研究所の設立は當初古市、山川、久保田三氏の熱心なる斡旋に依り成立せしものと云ふべく、大正七

年四月に至り工學博士横田成年氏初代の航空研究所長に補せられたり。又同年七月、東京帝國大學工學部に航空學科を新設し研究の範圍を擴大し、航空技術の發達を促し遂に航空學今日の進歩を見るに至らしめたるは、亦先生の盡力に俟つ所ありしに因れり。

日本式ローマ字會 先生は常にローマ字書式の統一に注目せられしを以て田中館愛橋博士は之を喜び、先生を日本式ローマ字會の理事に推薦せられたり。其の後田中館博士等が鐵道驛名のローマ字を日本式に書き改められんことを鐵道大臣に建議するに當り、先生の署名を求む、先生其の建議書を見て直ちに之に同意し、古市の氏名を署するに臨み、FをHに改むべきかと語られたりき、其の一字を苟もせずして、之れが改良に專念せられしこと斯くの如く、先年巴里の萬國地理學會に於て、日本の地名を日本式ローマ字を以て書くことを決議するや、先生は之を大成功なりとして悦ばれたり。又文部省に於てローマ字委員會の開かるるに當り、田中館博士は日本式ローマ字會より何人を委員に推すべきかを相談せられたるに、先生はローマ字を以て「特に推薦すべき者なし」と返書せられたるが、其の日附は昭和八年十二月十六日にして、先生既に病床に在り、恐らくは是れローマ字書翰の絶筆なるべしと稱せらる。

對外關係事業 更に對外關係の事業には、明治三十一年先生日本丁抹協會々長となりて兩國親善の爲に盡力せられ、同三十三年十一月丁抹國政府は特に其の功勞に對し「ダネブログ一等コンマ

ンドル」勳章を贈與せられたり、當時國際問題として我政府と丁抹人經營の大北電信會社との間に、海底電信取扱に關する契約改訂の際なりしが、先生は遞信次官として其の間に折衝努力せられ、種々調査研究の末暫く現状維持の已むを得ざるを認め、三十三年三月會社との契約を繼續して圓滿有利なる解決を得たるも亦其の事績の一なり。次に國際的有名なる白耳義の「ルーバン」大學圖書館の復興事業に關し、先生は之れが後援として日本に於ける同圖書館復興會委員長と爲り、金拾萬圓を醵集し、先生指導の下に日本文獻を寄贈せられたるが、白耳義政府は深く厚意を謝し、大正十五年七月「レオポルド」二世一等勳章を先生に贈與せり。斯くの如く先生は内外に於ける各種の事業に對し、斡旋盡力せられたる所頗る多く、一々之を枚舉するに違あらざるなり。

第七章 性行及び嗜好

第一節 性 行

先生天資明敏、人格高潔、毫も名利を求めず、恬淡にして清廉、常に自己を没却して、專念奉公の至誠に燃え、其の進退坐臥、一に國家の事を以て自ら任とし、其の專攻の學識は、之を實地に應用し、以て産業の發達に資し、其の經世の雄才は、之を行政上に施し、以て國運の隆昌を圖り、殊に國際關係に於て、勉めて本邦の文化を歐米諸國に紹介し、互に親善提携の實を擧げ、以て世界の工學及び工業上に貢獻する所あらんことを期せらる。是を以て先生の企畫する所、其の實行する所、一として國家的社會的事業ならざるなく、其の後進を導くや、亦常に此方針を以て本領たらしむ、故に先生の事蹟は、其の生涯を通じて實に此本領の規範たらざるはなかりき。

河川、港灣、鐵道等に關する先生多年の功績、或は京釜鐵道速成の献身的努力の如き、皆是れ先生が國家の爲に畢生の心血を注がれたる結晶ならざるなく、常に責任を重んじ、犠牲的精神を發揮せられたる實例は、枚舉するに違あらずと雖、今其の熱誠にして責任觀念に強き一例を擧ぐれば、明